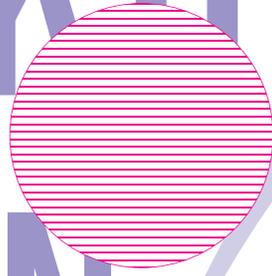
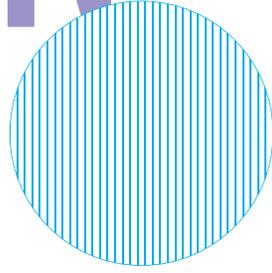


NAGAKIITE VISION 4U

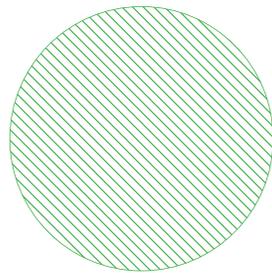
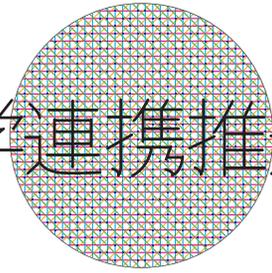


愛知淑徳大学

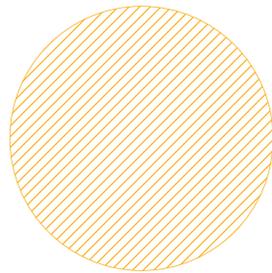


愛知医科大学

長久手市大学連携推進ビジョン 4U



愛知県立芸術大学



愛知県立大学

もくじ

2	序文 連携を力に
3	長久手市大学連携推進ビジョン4U
5	ビジョン1: 社会貢献
7	ビジョン2: 教育活動支援
9	ビジョン3: 研究推進
11	ビジョン4: 拠点整備
13	概要
[資料: これまでの取り組み]	
17	愛知淑徳大学の取り組み
41	愛知医科大学の取り組み
43	愛知県立芸術大学の取り組み
57	愛知県立大学の取り組み
73	長久手市の想い
77	結び チャレンジできるまち、長久手市に



序文 連携を力に

長久手市は人口約5.7万人^{※1}の小さなまちで、他の市と比べても市民と行政との距離がとても近く、市民同士もとても近い関係にあります。また豊かな自然が残り、農ある暮らしをすることができる環境にもあります。そして小牧・長久手の戦いの古戦場という歴史があり、古くから続く祭りもあり、愛・地球博記念公園などのレクリエーション施設も整備され、近年では人口も増加し、大型の商業施設の進出も続いており、「住みよさランキング」^{※2}では全国で3位になるなど、大きな発展を遂げています。

このように発展を続けている長久手市ですが、多くの課題も抱えています。例えば人と人のつながりの喪失、伝統や歴史の風化、市の特徴やアイデンティティーの希薄化、開発による自然環境の破壊、失われつつある農ある暮らしといった多くの問題に直面しています。確かに長久手市の利便性は高まったかもしれませんが、住民に地域を愛する気持ちはあるでしょうか？ 住民が人とのかつなかりを感じる事ができているでしょうか？ 新規に流入してきた住民の目は長久手市に向いているでしょうか？ 大学生は卒業した後も長久手市に住んでくれるでしょうか？ 長久手市はまさに、今、発展している状態かもしれませんが、それに「浮かれ」て人とのかつなかりを忘れ、自然破壊を繰り返し、歴史を省みず、本来持っていた良さを忘れてしまえば、取り返しのつかないことになってしまうのではないのでしょうか。

現在、着実に起こりつつある少子高齢化と人口減の波がいずれ長久手市にも来るとき、その波を乗り切っていけるかが問われています。そのような状況の中で自然を守り、歴史を再認識し、住んでいるまちのこともっと知ってもらうこと、住んでいるまちのことを好きになってもらうこと、住んでいるまちに誇りを持ってもらうこと、住んでいる人たちのつながりをつくることなど、長久手市においてやるべきことは山積しているのではないのでしょうか。こうした問題を解決するには、多くの人の知恵や関係機関の協力が必要になってきます。幸いにも長久手市内には多くの大学が存在します。教育と研究が主軸である大学では、現在様々な社会貢献に取り組んでいますが、それぞれの大学の特色を生かした多岐にわたる活動や研究、教育の協力が可能です。そしてそれは市と大学に新たな展開をもたらすことに繋がるでしょう。長久手市は、市民、企業、大学、長久手市が連携することが長久手市やこの地域を豊かにし、盛り上げていく力となることを期待しています。

※1 2017年4月現在

※2 東洋経済新報社、第24回全都市「住みよさランキング」(2017年)



長久手市大学連携推進ビジョン4U

長久手市は、大学連携を4つのビジョンに基づき推進します。

ビジョン1

社会貢献

長久手市は、地域社会が抱える課題解決のために「あなたも一歩、みんなと一歩」をめざして、大学生と地域をつなぎます。

1. 地域社会が抱える課題に取り組む市民・団体と、地域に貢献したい大学生や市民とが出会う場(きっかけ)をつくり、様々な連携をつくります
2. 地域社会が抱える課題解決に取り組むために生まれた「連携」を応援するしくみをつくります
3. 地域に貢献したい大学生や市民の新たな挑戦を応援し、一人ひとりのボランティア^{*3}という行動が持続し、新しい連携につながるための環境をつくります



地域防災訓練へのボランティア(県大)



医大祭模擬診断(医大)

ビジョン2

教育活動支援

長久手市は、市内にある愛知淑徳大学、愛知医科大学、愛知県立芸術大学、愛知県立大学の4大学(以下「4大学」という)の専門性と特色を生かし、地域課題を解決する社会貢献活動につなげるための教育活動を支援します。

1. 社会貢献活動にかかわる教育活動を支援します
2. 社会貢献活動にかかわる教育活動支援の基盤を整備します



地域活動の企画ミーティング(県大)

※3 ボランティア: このビジョンでは、「ボランティア活動は、個人の自由意思に基づき、その技能や時間等を進んで提供し、社会に貢献することであり、ボランティア活動の基本的理念は、自発(自由意思)性、非営利性、公共(公益)性、先駆(開発、発展)性にある」という、国の答申を用いた考え方を基本としました。非営利性については、「経済的な対価をボランティア活動の主な目的としないこと、そして、ボランティア(人)を安価な労働力と見なさないこと」としました。

参考文献

- ・文部省生涯学習局長通知(1992年8月3日)生涯学習審議会「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について(答申)」の送付について
- ・内海成治・中村安秀編著(2011)「国際ボランティア論」アカンシア出版

ビジョン3

研究推進

長久手市は、大学の教員、大学生の研究を支援し、長久手市の地域の課題解決と活性化を図ります。

1. 情報交換と交流、体験する場づくりを進めます
2. 情報発信、情報共有のしくみづくりを進めます
3. 研究活動のサポート体制づくりを進めます



長久手市における環境視覚伝達デザインの取り組み(芸大)



愛知県立芸術大学の学生による取り組み(芸大)



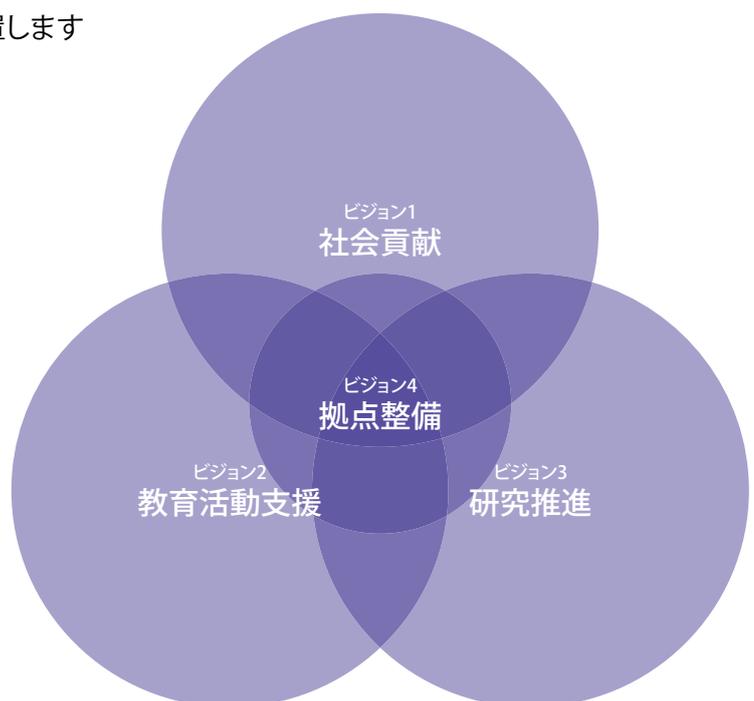
小学校でのアウトリーチ活動(芸大)

ビジョン4

拠点整備

長久手市は、地域、企業、大学と市とが相互に連携するための、地域連携の活動拠点整備を進めます。

1. 大学連携拠点体制を整備します
2. 長久手市による大学連携調整部署の整備をおこないます
3. 大学連携活動推進のための委員会を設置します



ビジョン1 社会貢献

長久手市は、地域社会が抱える課題解決のために「あなたも一歩、みんなと一歩」をめざして、大学生と地域をつなぎます。

長久手市は、このビジョンの策定にあたっては、「ビジョンづくりだけで終わらないこと」を常に念頭において、4大学の大学生と教職員担当者と一緒に「大学連携の在り方」を考えてきました。その答えをみつけるため、市の課題解決のために奮闘してきた4大学の卒業生(先輩たち)から話を聞いたり、地域社会の幸せを願って懸命に市内で日々活動している実践者から話を聞いたり、ディスカッションをしたり、市内を共に歩きながら「社会貢献につながる活動とは?」「ボランティアとは?」「大学生ができることとは?」「大学と地域が連携することの意義とは?」「連携から生まれる地域社会の幸せとは?」を、何度も繰り返し考えてきました。

話し合う中で、「大学生の活動が、本当に地域社会の幸せ(ハッピー)につながるのか?」という、素朴な疑問も出てきました。これについては、愛知淑徳大学CCCの10年間の取り組みで育まれた団体や企業の関係者に、「大学連携から生まれた幸せ実感」を聞くことで、大学連携の魅力と大学生の強みを確認しました(P.17-P.26参照)。

そこで4大学の大学生たちは、「理念を現実にする社会貢献活動やボランティア活動とは、そこに参加する人の成長につながること」と考えました。長久手市民の幸せは、実は大学生にとっても幸せになるということ。そして、大学生一人ひとりの幸せは、地域社会にとっても幸せにつながるということ。

すべての長久手市民の幸せ感の向上に向けて、「ホンキで取り組みたい」「地域の役に立ちたい」。だからこそ、「社会貢献活動やボランティア活動に取り組むみんなでつながりたい」という総意から、この目標ができました。

ここでの「つながり」とは、個人的な人の輪が広がることではありません。地域社会が抱える課題の解決のために立ち上がった人や行動がつながることです。長久手市は、その行動とは、対価や評価を求めるものでなく、一人ひとりの「志」や「夢」から生まれてくる主体的なものであってほしいと考えています。

重点プロジェクト

「あなたも一歩、みんなと一歩」を具現化するため、まずは大学生が地域が抱える課題を「知ること」、そして「感じて考える」ことから「行動する」ことができるようなしくみを4大学と連携してつくります。そのために、大学生一人ひとりの「志」や「夢」が実現できる社会をめざして、長久手市は4大学と連携して、下記のとおり取り組みます。

1. 地域社会が抱える課題に取り組む市民・団体と、地域に貢献したい大学生や市民とが会う場(きっかけ)をつくり、様々な連携をつくります

- 就職企業展のボランティア版のような見本市の実施
- 社会貢献活動・ボランティア活動の強化月間の設定

2. 地域社会が抱える課題解決に取り組むために生まれた「連携」を応援するしくみをつくります

- 長久手市らしいアワード(賞)の設置(副賞を「市広報紙などで、広くPRする機会を得られる」「市に対して課題解決につながる事業提案ができる」など)
- 大学生の社会貢献活動やボランティア活動の助成制度(応援団・伴走者を4大学の教員から選択できる)

3. 地域に貢献したい大学生や市民の新たな挑戦を応援し、一人ひとりのボランティアという行動が持続し、新しい連携につながるための環境をつくります

- 継続して行動できるための情報を得るための拠点づくり
- 専属のコーディネーターの配置

教育活動支援

長久手市は、4大学の専門性と特色を生かし、地域課題を解決する社会貢献活動につなげるための教育活動を支援します。

1. 社会貢献活動にかかわる教育活動を支援します

- 地域のニーズにこたえるために、大学生が長久手市での地域活動に参加し、学びの機会を得ることを促進する教育面での取り組みを支援します。
- 地域活動にかかわる授業・実習がおこないやすくなる環境を整備します。
- 市民、高校生・中学生・小学生も参加できるアクティブラーニングのプログラムを設置し、大学生を含む地域の多様な市民が学び合う教育活動を支援します。
- 長久手市は、4大学を中心に、近隣大学との情報交換を進めつつ、長久手市内での社会貢献活動に関する情報収集と発信をおこないます。

2. 社会貢献活動にかかわる教育活動支援の基盤を整備します

- 長久手市は、大学生の社会貢献活動・地域活動にかかわるニーズの把握をめざします。
- 社会貢献活動にとって有意義なブックリスト、サイト情報の集約をおこないます。
- 4大学と長久手市との協働で、社会貢献活動への参加のガイドラインを作成し、教育機能の明確化と、リスクマネジメント体制を構築します。地域の企業とのかかわりとして、長久手市内におけるインターシップ事業との連携も視野に入れます。

重点プロジェクト

「日本一の福祉のまち」(一人ひとりに役割と居場所のあるまち)をめざす長久手市において、大学生の社会貢献活動やボランティア活動がそれを推進する一助となるよう、社会貢献にかかわる教育活動を支援します。

1. 教育プログラムの提案

- 社会貢献活動・ボランティア活動の理解と方法論
- 長久手市の地域特性と課題に関する理解
- 長久手市のめざす方向性、地域ニーズの理解
- 4大学の専門性を生かした地域連携のあり方
- フィールドワーク:長久手市の歴史、市内の活動現場
- 社会貢献活動・ボランティア活動への一歩
- 社会貢献活動・ボランティア参加体験実習
- 報告会、ワークショップ

2. 事業実施プロセスの提案

- 長久手市は、4大学それぞれの専門性と特性を踏まえ、各大学と教育プログラムに関する検討作業を進めていきます。
- 他の重点プロジェクトとの有機的な結びつきを推進していきます。

研究推進

長久手市は、大学の教員、大学生の研究を支援し、長久手市の地域の課題解決と活性化を図ります。

大学の大きな役割の一つとして研究があります。大学はその研究を通して新しい発見や創造をおこない、社会の課題を解決し、活性化することが期待されています。そして研究活動を真に社会に有益なものとしていくためには、実社会とのつながりや交流が欠かせません。そこでこのビジョンでは、4大学の大学生や教員の研究や活動を支援するために、「情報交換と交流、体験する場をつくる」「情報発信、情報共有のしくみをつくる」「活動や研究のサポート体制をつくる」の三点を推進します。

重点プロジェクト

1. 情報交換と交流、体験する場づくりを進めます

長久手市は小さなまちで、様々な研究や活動を密接なコミュニケーションをとりながら進められる良さがあります。そこでまず4大学の大学生、関係者、教員や、長久手市の市民、企業、市民団体、職員などが定期的に集まる機会を設け、お互いに知り合い、顔の見える関係をつくり、様々な情報交換をする機会をつくります。また大学生や教員、市民が長久手市のことをもっと知り、長久手市ならではの体験をして、研究活動の新たな発想を得たり、研究のシーズやニーズを探る機会にします。

- 市民や企業、行政がどのような課題を抱えているのか、どのようなニーズがあるのかを知る場をつくり、大学や他の機関との共有性を高めます。
- 市民、企業、大学、行政がどのような研究や活動をしていて、どのような課題解決や地域活性化の能力を持っているのかを知る場をつくります。
- 大学間や大学生間、教員間がお互いの研究や活動について知る場をつくることにより、相互に補完する関係を築きます。
- 大学が研究成果を発表する機会をつくります。
- 市内の歴史の地を巡ったり里山を散策したりしながら長久手市のことをもっと知る機会をつくります。
- 長久手市の特徴である、農ある暮らしを体験するために、穀物や野菜の栽培や収穫体験をするなどの機会をつくります。
- 地域の住民やお年寄り、障がい者、子どもみんなが参加して、フィールドワークを体験する機会をつくります。

2. 情報発信、情報共有のしくみづくりを進めます

前述の機会では深い体験、交流ができますが、常にそのような体験、交流ができるわけではありませんし、限られた人しか参加できません。そこで交流を継続し、活動の幅を広げ、活動や研究の内容を発信するために、情報の記録、蓄積、発信が重要です。

- このビジョンのwebサイトやSNSを立ち上げ、活動や研究の情報を記録、蓄積、発信し、次の研究、活動につなげます。
- このビジョンに基づく事業を継続的に実施し、さらに多くの大学生や市民、企業が参加するために、積極的に情報発信します。
- 多くの大学生や地域の住民が参加するために、情報媒体のデザイン性も重視します。

3. 研究活動のサポート体制づくりを進めます

このビジョンは単に理論を聞いたり案を検討したりするだけでなく、実際にアイデアを実現し、地域において成果をあげることができる可能性があります。そして本当に計画を実現してこそ大学生が様々な学びを得ることができ、大学も研究の成果をあげ、地域もその恩恵を受けることができます。そのために以下の様なサポート体制を構築します。

- 長久手市や4大学が、このビジョンにかかわる事業の立案や事業を遂行し実現するための、4大学と共有可能なサポート体制の構築を推進します。
- 計画、実行、評価、改善、記録のサイクルを構築します。

このビジョンを実際に遂行するためには、計画を検討、実施し、検証し次へつなげていくサイクルを構築する必要があります。一般的にPlan(計画)、Do(実行)、Check(評価)、Act(改善)というPDCAサイクルがありますが、ビジョンの主体となるメンバーは大学生で、入学や卒業によってどんどん入れ替わっていくため、一般的なPDCAサイクルに加えてRecord(記録)を追加します。それによって過去の活動や研究を参照して新たな研究活動に発展していくことができるしくみをつくります。具体的には、

1. Plan(計画): 計画を作成する、そのためのアドバイスやサポートをおこなう
2. Do(実行): 計画に沿って実施する、そのためのサポートもおこなう
3. Check(評価): 実施した計画を長久手市や4大学が評価する
4. Act(改善): 実施が計画に沿っていない部分を調べて改善する
5. Record(記録): 計画や実施のプロセスや結果を記録し、発信する

というPDCARサイクルを構築します。このサイクルを確実におこない、長期的に継続して成果をあげることによって、このビジョンについて4大学や地域住民、企業、長久手市での認知度を向上させ、スムーズな運営をめざします。

拠点整備

長久手市は、地域、企業、大学と市とが相互に連携するための、地域連携の活動拠点整備を進めます。

1. 大学連携拠点体制を整備します

- 地域からの声、学生ワーキングにおいて、情報提供や、大学生同士の交流、大学生が集える場、大学生と地域がつながる場を求めるニーズを把握することができました。このニーズにこたえるために、地域、企業、大学、長久手市がより一層連携を進め、事業を効果的に実施するための、大学連携事業の拠点を整備します。
- 特に力を入れるのは、情報を集約し、情報を提供するための機能、大学生同士が集える場、大学生と地域が集える場、地域と連携する事業を進めるための委員会の設置です。

2. 長久手市による大学連携調整部署の整備をおこないます

- 長久手市は、大学連携を調整する担当部署を整備します。また、専属コーディネーターを配置します。

3. 大学連携活動推進のための委員会を設置します

- 長久手市は、地域、企業の情報を集約し、大学生に対して情報を提供するための委員会を構成し、webサイト上での情報集約の拠点も含めて整備します。
- 長久手市は4大学を中心に、近隣大学とも情報共有しつつ、4大学の社会貢献活動やボランティア活動の会議、大学の大学連携担当者、地域活動実践者、企業の大学担当者による会議、報告会、イベントが実施できる場を整備します。
- 長久手市は、長久手市大学連携担当者、教員と共に、4大学の大学生等も参加する推進部会を構成します。

重点プロジェクト

「日本一の福祉のまち」(一人ひとりに役割と居場所のあるまち)をめざす長久手市の拠点として、リニモテラスなどにおける集いの場とweb上の拠点整備をおこないます。

1. 拠点の定義

- 「リニモテラス公益施設(仮称)整備基本計画」に基づく拠点の整備
- 研究、教育、社会貢献活動やボランティア活動に関する情報収集と提供(長久手市、4大学)
- 大学連携事業推進委員会の組織(長久手市、4大学)
- 4大学学生ボランティア報告会
- 専属コーディネーターの配置(長久手市)
- 大学生の交流の場、大学生による相談窓口の設置
- その他、教育、研究、交流の計画と連動

2. 事業実施のプロセス

- 地域、大学、企業、長久手市の地域連携に関するこれまでの取り組みを把握し、アーカイブを作成します。
- 大学連携事業推進委員会で集約した情報から、大学連携の拠点に必要なニーズを検討し、大学連携活動を推進するための実効性を持たせるための協議を進めていきます。
- リニモテラス整備に向けた長久手市の連携事業と協働して準備を進めます。

長久手市大学連携推進ビジョン4U概要

背景・趣旨

○さらなる連携をめざして

市内に4つの大学が立地し、周辺を6つの大学に囲まれる長久手市は、多くの大学や大学生が集まり、大学生に彩られた活気あふれる魅力あるまちです。大学生は地域や企業の将来の担い手として、まちの活力向上に無くてはならない存在となっています。

現在、長久手市は、「全国で一番若いまち」(2015年度の国勢調査結果)として、継続的に人口が増加していますが、2050年頃には人口が減少し始め高齢化が進み、同時に少子化の影響で、大学に進学する年齢の人口が大幅に減少する状況にあります。大学生数の減少は、地域経済の後退やまちの活力や魅力の低下をもたらす恐れがあります。

また、現在、長久手市と4大学とは、包括連携協定を締結し、これに基づいて、行政と1つの大学との間で連携事業を展開していますが、個別の連携では部分的な効果しか発揮されておらず、様々な課題に対応できていないのが現状です。

そのため、4大学とその学生・市民・企業・行政などとネットワークを築いて、最大限の相乗効果を発揮させるためのしくみが求められています。

○高まる大学の地域社会への貢献と連携の機運

東日本大震災において被災地でのボランティア活動が注目されました。また近年では地域に開かれ地域に貢献する拠点として、大学の果たす社会的な役割が見直されています。

文部科学省は大学における教育課程の共同実施制度を設け、その制度の趣旨を、「経済・社会のグローバル化の中、大学は「知の拠点」として各地域の活性化への貢献とともに、国際的な大学間競争の中で新たな学際的・先端的領域への先導的な対応も必要。このため、複数の大学がそれぞれ優れた教育研究資源を結集し、共同でより魅力ある教育研究・人材育成を実現する大学間連携の仕組みを整備するもの」^{※4}として大学の地域の活性化への貢献と大学間連携を推奨しています。

また、内閣府がおこなった「国民生活選好度調査」では、ボランティア活動として、まちづくり、防犯・防災、学術・スポーツ・文化芸術振興、介護・福祉、健康増進など、様々な事例が報告されており、ボランティア活動などの社会貢献を促進する社会的気運は高まっています。

※4 文部科学省「大学における教育課程の共同実施制度について」の概要より抜粋

位置づけ

長久手市が定める第5次長久手市総合計画の基本施策「大学をまちづくりに生かす」において、1.大学連携推進協議会の設置、2.大学連携拠点施設の開設、3.大学連携基本計画の策定がうたわれており、大学・大学生を本市の貴重な資産ととらえ、まちづくりに生かす協働のしくみが求められています。

本ビジョンの進捗状況の共有について

長久手市の担当課が施策の実施状況を取りまとめの上、大学連携推進協議会などの団体と、取り組みの課題や進捗状況などについて情報交換をおこないます。なお、長久手市の取り組みについての進捗状況の確認等については、総合計画や関連計画と連動させておこないます。

また、計画期間は2018年度から2027年度までの10年間とします。なお、社会情勢の変化や、国・県の行政施策の動向などを踏まえ、必要に応じて随時内容の検討と見直しをおこないます。

長久手市大学連携推進ビジョン4U概要

まちの将来像

長久手市が考える大学連携の推進されたまちには、次のものが挙げられます。

- 大学生がまちに愛着やつながりを持ち、大学卒業後も住み続けたいと思うまち
- まち全体で大学生を育て、大学生の力を十分に生かし、より魅力あふれるまち
- 大学生が社会人をはじめ地域の団体とつながり、大学生ならではの自由で豊かなアイデアが生かされるまち
- まちが大学生の研究や調査、社会貢献活動の実践の場となり、大学生の「やりたい!」という気持ちが実現できるまち

期待される効果

行政

- 大学の有する知識、技術、人材などが、地域とつながることで、最大のネットワークで、地域の課題解決や魅力向上などに取り組むことができます。
- より活発な地域交流によって、地域活動を活性化させることができます。
- 大学生と地域との関係が強まることで、卒業後も地域に住み続ける学生を増やすことができます。

市民

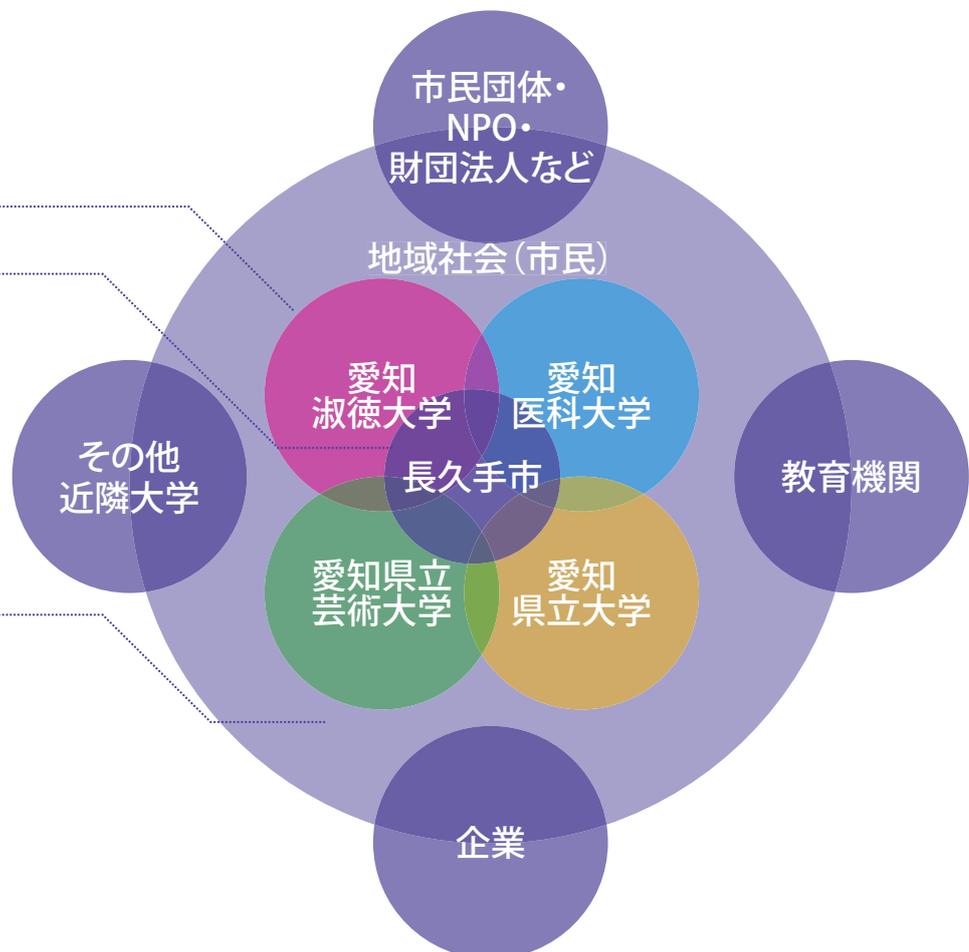
- 地域での交流やまちづくりが活発になることで、市民一人ひとりが居場所や役割を持ち、住みよさや幸せを実感することができます。
- 大学の資産を活用することで、生涯学習の充実や、文化、交流、健康、福祉などの増進に役立てることができます。

大学生

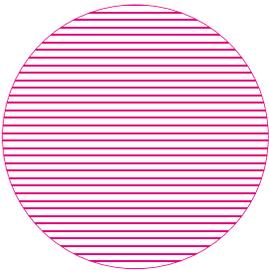
- 一人ひとり「志」や「夢」が実現できるような場を得ることができます。
- 地域活動に参加するきっかけを得やすくなります。
- 地域活動を通じて、個人の成長につながる学びを得たり、社会とのつながりを感じられたりすることができます。

大学

- 地域社会を研究や教育の「場」とすることで、より実践的で地域社会に根ざした研究・教育活動をおこなうことができます。
- 地域での交流から様々なフィードバックを得ることで、研究や教育に生かすことができます。
- 大学間の連携により、より多様で魅力ある研究や教育の開発をおこなうことができます。



長久手市における大学連携推進体制イメージ



愛知淑徳大学

大学連携から生まれた幸せ実感

CCCとは、愛知淑徳大学コミュニティ・コラボレーションセンターの略です。「違いを共に生きる」という大学理念を実現するためのテーマの1つ「地域に根ざし、世界に開く」を具現化するため、2006年9月に開設された教育センターです。

開設から10年の歳月が経ちました。学生たちは、地域が抱える問題解決につながるボランティア活動に参加し、学外の様々な地域の皆さんから実践的な生きた知識を習得しています。それだけではありません。ボランティア活動に参加する学生たちは、多くの人との出逢いと喜びを得て、人生の目標や生きがいを見つけることにもつながっています。それは、CCCを支えてくださる地域の「大人」たちが常にそばにいて、素敵なコラボ(連携)を築いてくださっているからです。

しかし、コラボが初めからうまく築けたわけではありません。そこには、たくさんのドラマや試行錯誤がありました。では、どのようにコラボが育まれたのか。ここでは、そのいきさつと、応援してくださっている地域の団体や企業の関係者の皆さんの「声」の一部をご紹介します。

コラボ(大学連携)のいきさつと支えてくださる皆さんの声

NPO法人 楽歩

ボランティアスタッフとして毎年多くの学生が参加するイベントの1つに、長久手市福祉まつりがあります。楽歩さんは、障がい者の方が運営するCaféを毎年出店されていました。このCaféの一杯のコーヒーを飲むと、学生も私たちCCCのスタッフもとても幸せな気持ちに…。

そんな出会いから5年。学生たちが出す様々な企画にいつもご協力いただけてきました。

リモの活性化をめざしたイベントで長久手古戦場駅に楽歩Caféを出していただいたり、子ども食堂にお邪魔させていただいたり。昨年は、学生×楽歩さんで共同Café「みんな de Café」を開きました。その活動を通じて肢体不自由、自閉症、知的障がい、高機能障がいの皆さんと接した学生たちはみな言います。「障がいのある人は、できないことが多いと思っていた。でも、違う。自分よりずっと上手にできることもたくさんある。だから、一緒なんだ」。

本学の理念は「違いを共に生きる」。言葉では簡単ですが、それが生活の中で自然に営まれていくのは大変なコト。学生たちは楽歩さんから「違いを共に生きることの素晴らしさ」を体得する機会をいただいています。



NPO法人楽歩 副理事長

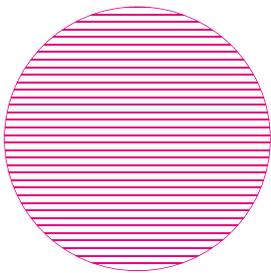
大原由恵さん

学生さんの前向きな姿勢や行動力には、驚かされるばかり。「福祉のイメージを変えるにはどうしたらいいか」という私たちの団体が抱える課題について、学生さんたちが提案してくれました。それが、長久手市の商業施設で共に開催した「1日カフェ」です。このイベント準備で作業所のメンバーは、心を開いて交流して下さる学生さんにつられるようにして、自分たちの障がいのことを学生さんたちに自然に話し始めました。それは、今までに見たこと

ない自然の光景で、私はとても感動してしまいました。障がいを持つ人たちが同じ地域に暮らす人と自由に交流することは、実はとても大変なことだからです。

私たちが暮らすまちで「障がい者との自由な交流が当たり前の社会」という福祉になるように、皆さんの力を借りながら地域貢献活動を続けていきたいです。





愛知淑徳大学

大学連携から生まれた幸せ実感

介助犬総合訓練センター 「シンシアの丘」

2009年に長久手市に開所された、日本初の介助犬専門訓練施設です。開所に伴い、理事の高柳さんから「協力してほしい」とお声掛けいただいたことで、CCCとの連携の在り方を共に試行錯誤してきました。

当初に学生が参加した活動は、「個人が参加しやすい」という理由から、センターで清掃することや「介助犬フェスタ」の運営をサポートすることが主でした。そのせいか、継続してボランティアに参加する学生がなかなか集まらないのが現状で…。

しかし「それではもったいない」と学生たちが立ち上がり、「教えてグッデイ、介助犬を知ろう!」という学内に向けての啓発チームが誕生。後の学生団体「チームわんわん」となりました。それ以後、「介助犬フェスタ」の本学の学生ボランティア運営リーダーを「チームわんわん」のメンバーが担います。また、長久手市立東小学校などでは、介助犬の啓発を目的にした講演会を企画し、介助犬のデモンストレーションも学生が行っています。2017年度からは「チームわんわん」を卒業したメンバーが同センターへ研修生として入学するなど、これまで以上に絆を深めています。



社会福祉法人 日本介助犬協会 専務理事

高柳友子さん

(介助犬総合訓練センター「シンシアの丘」)

2012年から継続的に実施いただいている小学校での介助犬啓発事業「介助犬を知ろう!」では、授業の日程調整や内容の決定までを当会と先方の間に入って「チームわんわん」の学生メンバーが主体となって進めてくださっています。特に「介助犬の認知度向上・育成支援のためにどうすれば良いか」な

どの意見を集めて、新たな啓発企画やイベントのご提案をくださり、それを実施できるまでに至るのは、学生の皆さんのお陰です。

毎年授業をおこなっている長久手市立東小学校では、校舎を歩くと「あっ、介助犬!」と声を掛けてくれる子どもたちが多くいます。こんなふうに街中で「介助犬」という言葉が自然に聞こえる地域を、そして誰にでも優しい地域を、学生の皆さんと一緒につくっていかれたらと思っています。



名古屋市名東区社会福祉協議会・ボランティア連絡会 (V連)

V連のメンバーは、CCCの開設からずっと学生たちを支えてくださった皆さん。2006年12月におこなったCCCの開設記念の交流会でも、V連の皆さんは名東区内のボランティア活動をご紹介していただき、どんなコラボが学生とできるか、たくさんのアイデアをくださいました。

その想いがカタチになった一つの事例が、「めいとうボランティア展inCCC」です。2007年7月、2日間にわたって開催した名古屋市内初の大学生と地域をつなぐボランティア啓発イベントで、地域の課題解決につながるコラボレーションを生み出すために、まずはお互いを知ることから始めようと考え、実行に至りました。一緒になって一つのボランティア啓発イベントを成功させたことで、互いの絆がより深まることとなりました。このご縁が現在もずっと変わらず続き、毎年たくさんの学生がV連や福祉施設さんのボランティアに参加しています。中には、V連の施設に就職した学生も。学生たちを孫のように可愛がって、「人との出会いの大切さ」を教えてくださいました皆さんです。



名古屋市名東区社会福祉協議会・
ボランティア連絡会
久保田洋子さん
(名東フレンズ)

畔柳明男さん
(視覚障がい者ガイドヘルプ「ひまわり」)

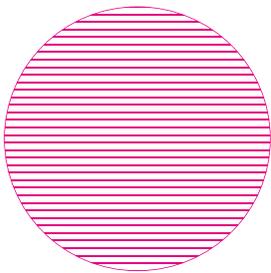
CCCさんがスタートしたときから一緒にボランティア活動をおこなう間柄です。学生さんたちは年齢的にちょうど子どもと孫の間であることから、ふだんはあまり関わる機会がない世代。だからこそ一緒にボランティア活動をする時間は、彼らがどんなことに興味があるのか、直に知ることができる貴重な時間でもあります。学生さんとの会話



が、視覚障がい者のガイドを務めるときの話題のヒントになったり、色々と勉強になりますね。反対に、私たちが気づいたことは学生さんたちに直接注意します。好きなことが言える、それがCCCさんとはできる関係です。

学生さんがボランティア活動を通じて成長し、自分のやりたいことを見つけて社会に巣立っていく姿を見守ることができることも、大きな喜びです。活動を通じたすばらしい出会いに感謝をする毎日です。





愛知淑徳大学

大学連携から生まれた幸せ実感

NPO法人 ボラみみより情報局

2007年度にCCCが名東区社会福祉協議会と協働し、名古屋市内初の大学生と地域をつなぐ「めいとうボランティア展inCCC」を開催しました。その活動の意義を高く評価して下さったボラみみさん。学生たちの可能性をもっと広げて、ボランティアをしたい人と求める団体をつなげませんか、というご提案をいただいたことから、コラボが始まりました。2008年から2年間にわたり、ボランティア啓発イベント「ボラみ展inCCC」を一緒におこないました。

ここでは、県内で活躍する様々な分野のボランティア団体が約40団体も参加して下さり、学生たちにたくさんのボランティア活動との出会いの場ときっかけをつくって下さいました。これがご縁で、学生と団体による新しい連携も誕生しました。そして、大学ではCCCから提案したNPO(ボラみみ)での長期インターン制度のスタートにもつながりました。

ボラみみさんはこれらの学びを生かして、市民へのボランティア啓発イベント「ぼらマッチ!なごや」を名古屋で恒例化し、若者と地域・ボランティアをつなぐ環境づくりに尽力されています。



NPO法人 ボラみみより情報局 代表

織田元樹さん

若い人たちと関わることは、我々ボランティア団体を運営する者にとって大きな学びの場でもあります。私たちが「若い人たちになりきって」新しい時代のことを考えても限度がある。しかし、学生のみんなは初めから「新しい考え方」を持ち合わせているんです。彼らの提案や発言にはたくさんのヒントがあり、またその前向きな姿勢に接していると「未

来も捨てたもんじゃないな」という気分になってきます。それに学生同士が一緒になって学び合うことで、互いが目に見えてぐんぐん成長していくのです。それは、大人が与えてできるものではありません。学生さんたちの持っているパワーに驚かされますね。

学生さんから元気をもらい、地域が元気になる。そして、未来を担う若者も成長できる。ステキな相乗効果が、CCCさんを起点に、始まっています。



NPO法人 ふくぷくばるーん

ふくぷくばるーんは、入院中の子どもたちに、バルーンを使った遊びの機会を提供している団体です。その設立者である大竹さんが、「この活動に協力してほしい」とCCCに訪れ、コラボが始まりました。ご自分の息子さん病室のベッドでいつも辛そうな顔をして苦しんでいたこと。入院しているどの子どもも一時でいいから笑顔になれると嬉しいと思うこと。大竹さんは、力強く言葉を重ねました。「バルーンを使って笑顔にしよう!」と語ってくださったことが、昨日のことのようです。

多くの学生が大竹さんと共に色々な病院の子どもたちの元に向かいました。3年間入院している18歳の女の子は学生との時間を心待ちにしていました。バルーンを間に挟んで、女子トーク。病気であるなしにかかわらず、全員の弾ける笑顔が印象的でした。また6歳の男の子は心の病がありますが、バルーンでバドミントンをつくって、一緒に元気に風船ラリーを行いました。

学生たちは出会う子どもたちの笑顔を見る度に、「目の前にいる子どもたちを少しでも支えたい」と考え、学生が次の学生を巻き込みながら活動を続けています。



NPO法人 ふくぷくばるーん 理事

大竹由美子さん

学生さんが様々なイベントで「ふくぷく」の説明をしてくれているのが本当に嬉しいです。こんなに「ふくぷく」の話ができて…学生さんたちは愛知淑徳大学生だけど、「ふくぷく」の子どもでもあるように感じています。それはCCCさんと一緒に育ててきたから

でしょうね。

学生さんは子どもたちには大人気で、絶対必要な存在です。「ふくぷく」の学生ボランティアの8割が愛知淑徳大学生。中には学生リーダーになって、ボランティアの取りまとめをしてくれている学生もいます。学生ボランティアのうち、卒業後も働きながら活動に参加してくれるのは数人で、そのほとんどが愛知淑徳大学生です。

「ふくぷく」のボランティアに初めて参加してくれる学生さんにお伝えしているのは、感じたことを忘れないでほしいこと。体験して、自分で気づいて得たことは、社会で必ず生かされて人生の糧になることです。





愛知淑徳大学

大学連携から生まれた幸せ実感

NPO法人 地域の未来・志援センター

環境問題に関心を持っていた学生たちが、損保ジャパン環境財団のラーニング制度に2007年から多数参加しました。この制度が終わっても学生たちの探究心は止まらず、自分たちでも新たに団体を運営したいと動き始めました。その活動をずっと応援して下さったのが、地域の未来・志援センターさん。「様々な大人」が見守って下さったことで、学生たちは「おしゃれにエコをしたい」をコンセプトに掲げた「OSHARECO map 作成会」を立ち上げ、エコ啓発イベント「アースデイ愛知」の企画・運営などにもチャレンジ。これらのイベント企画時にも助言をくださり、学生たちにいつも伴走して下さいました。

こうした学生たちの活動成果をCCCでは「エコメッセ・やりませ!」と題し、2008年に地域社会へ発信しました。これは、身近にできるエコアクションをキーワードに、地域と連携して学生たちがおこなっている多様な環境活動を報告するイベントでした。楽しみながら活動にチャレンジしている学生たちの行動は持続可能な活動につながると評価され、2010年にCCCが愛知環境賞優秀賞をいただくことにもつながりました。



NPO法人 地域の未来・志援センター 元専従スタッフ
北村政智さん (NPO法人すけっとファミリー)

「やってみたい」という学生たちの声に、私は素直に応援したいと思いました。「何かあったら私が尻をふく」、そんな気持ちでした。大人がどうのこうのと言っても、学生の心には届きません。自分で考えて動かないと気づきは得られないです。学んだことや考えたことを、言葉にする、人に伝えることで深

まります。短期間で成果を求めてしまうと、学生たちは我々の期待に応えようと、大人が思い描く



答えに向かって進もうとします。それでは面白くないと思いました。私は、大人の価値観を押しつけることのない「学生たちが自由に遊べる場」を提供したいと思いましたし、恵まれたことに当時の私の周りには、それができる(許される)場所がありました。

当初CCCとはコラボしているという気はなかったです、たまたま起こった現象であったと。たくさんの大人が見守り、支え、学生たちがのびのびと活動できる場所。いろんな人がごちゃまぜの世界の中で、学生たちの可能性を広げる応援をし続けていきたいと思います。

(株)デンソー 社会貢献推進室

デンソーさんは、働く地域社会に貢献しようと活動する社員一人ひとりを応援するポイント制度、通称「DECOポン」(現在はデンソーはあとふるポイント)を2006年から開始しました。CCCも同時期に誕生したことから、この10年いつも一緒。デンソーさんの地域貢献活動の一つであるハートフルデーから始まり、衣料回収活動、現在力を入れているハートフルまつりまで。毎回60人ほどの学生が参加しています。中には、「(同社員の)お父さんも誘って一緒にボランティアに参加しちゃった」という学生もいます。

またデンソーさんとの出会いは、本学の大学祭にも大きな影響を与えました。デンソーさんの活動に参加した学祭メンバーは、デンソーさんの姿勢から地域との連携の重要性を学びました。そして「大学祭は地域住民からのご協力あって開催できていること」と改めて実感。感謝の気持ちをカタチにしようと考え、学祭時の前日と翌日の2日間、最寄駅から大学までの約4キロの通学バス経路におけるクリーン活動を2007年から開始しました。この活動は、後輩にも趣旨と意義が引き継がれ、現在も続いています。



株式会社デンソー
総務部社会貢献推進室
杉浦龍次さん

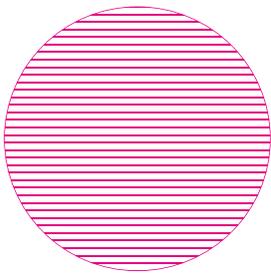
元株式会社デンソー
総務部社会貢献推進室
大須賀恵子さん

(公益社団法人スペシャル
オリンピックス日本・愛知)



CCCさんの設立時期と、私たちがボランティア活動に力を入れ始めた時期がちょうど一緒で、その頃からの付き合いです。まだまだ駆け出しの頃から互いを知っているので、それぞれ違う組織ですが一緒に体制を整え、一緒に育ってきたという感覚があります。右も左もわからない中で、「ボランティアを支援する組織をつくろう」という同じ目標に向かって頑張る仲間がいてくれたことは、とても心強かったですね。

そうやって積み重ねてきた月日があるからこそ、今ではボランティアスタッフを募集したいときに、気兼ねなくCCCさんをお願いをすることができます。さらに、学生さんたちは「ボランティアの基礎」をしっかりと身につけているので、安心してイベント運営をおまかせできます。人材への信頼感は、10年間かけてお互いが共に手を取り、歩んできたことの結晶だと思っています。



愛知淑徳大学

大学連携から生まれた幸せ実感

東邦ガス(株)・ガスエネルギー館

8年前、子ども対象に活動を行っていた1人の学生が、「昔訪れたガスエネルギー館に来る子どもたち向けに活動をおこなってみたい」とCCCスタッフに語ったことが、東邦ガスさんとのご縁が生まれたきっかけです。その学生の熱い想いを受けCCCから、ガスエネルギー館でおこなわれていた子ども向け環境イベントに参画させていただけないかとお願いしたことが契機となり、東邦ガスさんとのコラボがスタートしました。当初は企業のCSR^{*5}ということで、学生の企画・運営との「実施結果」への考え方の食い違いがあり、うまくいかないときもありました。例えば、実績を求めたばかりに、子どもたちの参加人数をカウントすることだけに注力してしまったり、学生たちが「子どもたちに何かを伝えたい」「自らを高める学びの場としたい」という目的を見失いそうになってしまったり。

しかし、現在では企業、学生の持ち味を生かした環境学習の場を創り出せるようになってきました。これはひとえに、「子どもたちに残していきたいものは何か」について一緒に話し合いに応じてくださった東邦ガスさんのおかげです。



東邦ガス(株)広報部 ガスエネルギー館 副館長
八木裕介さん

地球温暖化について学ぶことができるガスエネルギー館は「学び」の要素が強く、子どもたちにとっては、少しとっつきにくい施設かもしれません。しかし、このハードルを低くして下さるのが、愛知淑徳大学の学生の皆さんです。

毎年3000人ほどの来場者で賑わうイベントの運営に力を貸して下さいます。学生さんたちは、多くのブースのアイデアを提示して下さり、それを



実行するために力を注いで下さいます。そうやって学生の皆さんが活動を楽しんでいることが子どもたちにも伝わるでしょう。ブースはいつでも超満員で、子どもたちもとてもいきいきとしています。イベントを企画している我々も、イベントを運営する学生さんたちも、そしてイベントに参加する子どもたちも、全員がHAPPYになれる。「地域貢献版の“三方よし”」が実現しています。

※5 CSR:企業の社会的責任 (corporate social responsibility)

一般社団法人日本経済団体連合会は、企業行動憲章の中で、『良き企業市民』として、積極的に社会に参画し、その発展に貢献することなどをあげています。それらを実行していくために、企業行動憲章実行の手引き(第7版:2017年)では、「社会の発展への貢献に向けて、NPO・NGO、地域社会、行政、国連機関など幅広いステークホルダーと連携・協働する」、「従業員のボランティア活動を支援する」などが明記されています。



愛知淑徳大学

2017年8月4日(金)第2回4大学合同学生ワーキング(愛知淑徳大学)にて

CCCの地域連携の取り組み

小早川真衣子先生

愛知淑徳大学コミュニティ・コラボレーションセンター助教

学生が中心となった地域連携推進の場。

学生たちが、自分の成長を自分らしく

つくっていける場になればと考えています。



本日は、愛知淑徳大学コミュニティ・コラボレーションセンター、略して「CCC」の全体像をご紹介したいと思います。CCCは、世代や性別、障がいなど、様々な違いを越えて学び合い、自分らしく生きるという本学の理念「違いを共に生きる」を実現する場所として、2006年9月に開設されました。「地域に根ざし、世界に開く」というテーマのもと、地域との関わりを深めながら、学生が中心となった地域連携を推進しています。

いつも、本センターのこの部屋の壁には、地域のボランティア情報などがたくさん掲示されています。また、学生が自ら仲間を集めて活動している「CCC学生団体」を紹介する壁もあります。ここでは、学生団体に所属する学生が新しいメンバーを勧誘していたり、地域活動の準備をしていたりと、活発な様子が見られます。また、毎日のように学生の一步を応援する「学生スタッフ」が在室し、訪れる学生たちの相談にのるなどして運営を手伝ってくれています。

2017年、学生スタッフの発案で、CCCを訪れる学生たちに向け、「あなたにとってCCCとは?」という問い掛けをする企画を実施しました。その結果、学生たちからは「新しい出会いが見つかる場所」「新しい自分を発見できる場所」「新たな発見ができる場所」「人とのつながりが感じられる場所」という回答が返ってきました。ボランティアなどを通じて地域とつながることが、これまでにない新たな経験をもたらしてくれるものと捉えているようです。

こうした学生のために、私たちCCCスタッフは学生それぞれの成長やニーズに応えられるようしくみを用意しつつ、地域連携を推進しています。それには大きく三つあります。一つ目はボランティアのコーディネートです。地域や学生からの要望を聞きながら、各分野のボランティア情報の紹介を積極的におこなっています。教室を飛び出し、現場に行けば、地域社会の実態を手や目や耳で感じ、体全体で学ぶことができます。このような機会を通じて、地域とつながる楽しさや意義を感じてもらいたいと思います。

二つ目は、学生団体へのサポートです。CCCには既存のボランティアだけではなく、学生ならではの働き掛けを自主的に立案して、実行しようとする学生たちがいます。自分たちが見出した課題の解決に向けて、継続的に取り組むためです。この活動を支えるために、「CCC学生団体」と呼ぶ登録制度を設け、スタッフが伴走しながらアドバイスをしたり、またミーティングの場所や機材の貸し出しなどをおこなっています。また資金不足など金銭的な問題が活動の妨げにならないよう、「チャレンジファンド」という助成制度を学内に設けており、毎年6月に公開コンペを実施しています。



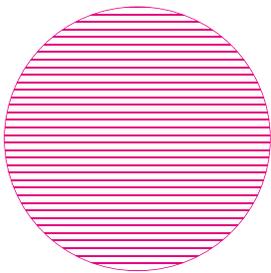
三つ目は、CCC科目の開設です。地域との連携や活動推進に求められる知識・マインド・スキルを相乗的に高められるようなカリキュラムをつくり、学びを深める機会を提供しています。実際の授業では、既にボランティア活動をしている学生とそうでない学生が出会うなど、学生同士が刺激し合いながら学んでいます。

では、このCCCを活用している学生たちは実際どのように感じているのか、学生の声をご紹介します。 「知的障がいを持っている人が一生懸命に取り組んでいる姿を見て、自分も夢中になれた。人が人の心に語り掛ける力の強さを知った」。これは、2017年7月に本学でおこなった「障がい者アスリートとスポーツをしよう!」というボランティア活動(スペシャルオリンピックス日本・愛知との共催)に参加した学生の声です。彼は、自分に何ができるのかを悩みながら参加したのですが、「まず、一生懸命やることで、そこに自分がいてもいいんだと思えた。そして、自分が一生懸命人に語り掛たら、その想いは伝わるんだなと思った」とも振り返っていました。

また、科目「CCCスタートアップ講座」でおこなったグループワークで、学生が得た気づきをご紹介します。「様々な問題を持つ人がつながることで、支援を必要としている人が支援をする側に回ることができる気づいた。そのため、自分が大学だけでなく、様々な人と交流を持つことで、社会問題のつながりを見つけられるのではと思った」。これは、まだボランティア経験のない学生から出た言葉でした。まだ一步を踏み出してはいないけれど、授業を通して知り得た様々な地域の課題と自分の関心とが合わさったことで、自分が地域に関わる意義を見つけられそうな予感がしているようです。彼女の次のステップがとても楽しみです。

CCCを訪れる学生たちは、色々な動機や想いを抱えています。初めて来た人の中にも、「何もできないかもしれないんですけど、何かやってみたいんです」という人、あるいは自分で地域活動の目的をしっかりと定めていて「こういうことがしたいです!」とスタッフに熱く伝えてくれる人などがいます。また、いくつかの体験を経て「何かできる気がする」と自信を高めていく人もいます。

最後に、私たちスタッフが大切にしていることをお伝えします。ブイ・チ・トルン先生(交流文化学部教授、前センター長)がセンター開設時に寄せてくださった言葉です。「今日もCCCのドアが広く開いており、君たちのために開いている。ちょっとした勇気を。初めの一步が、君たちの人生を十倍も百倍も楽しく有意義なものにしてくれると信じている」。色々な人がいて、誰もが自信满满でこの場所を訪れるわけではありません。だからこそ私たちスタッフは、CCCでの活動が誰にでも開かれている成長のチャンスになることを意識して、自分の成長を自分らしくつづけていける場になるように一人ひとりの声に耳を傾けることが大切だと考えています。それでも、学生たちの頑張りや笑顔、そして地域の皆さまからの叱咤激励を支えに、走り続けたいと思います。



愛知淑徳大学

2017年8月4日(金)第2回4大学合同学生ワーキング(愛知淑徳大学)にて

CCC学生スタッフの取り組み 01

加藤沙也果さん

愛知淑徳大学メディアプロデュース学部メディアプロデュース学科都市環境デザイン専攻3年



どうしたら防犯が楽しく学べ、
子どもたちに喜んでもらえるか、
そんなことを考えながら活動しています。

私は、CCCで学生スタッフとして活動しています。今は長久手市で一人暮らしをしていますが、出身は新城市です。新城市は消滅可能性都市に指定されていて、数十年後かには経済維持ができないと言われています。私は新城市が大好きで、この市のために何かできることはないかと思っていました。そして、大学1年生のときに、市がおこなっている「若者議会」という手段を見つけました。

それは、若者が意見を出し合って、若者が活躍できるまちの実現に向けて政策を立案するという行政が設置した組織です。参加しているのはほとんど高校生でした。この組織の一員となることで、10代のめっちゃ頑張っている高校生と関わり合い、地域の人たちと色々なお話をし、新城市への様々な要望を直に聞くことができました。その中で、一番感動したのは、若者を必要としてくれる大人が地元にいることでした。

しかし、長久手市から新城市までは3時間もかかり、通うのが大変でした。そこで、今住んでいる長久手市にも自分が役に立てる活動のフィールドがあるのではと、シフトチェンジすることにしました。現在は、愛知県警さん、長久手市さん(長久手市内の小学校、児童館)、そして愛知淑徳大学と、三つの組織が連携して活動している学生団体「tASUkeai」の代表をしています。子どもたちの「自分で考える力」や「助け合う力」を育むことをテーマにした防犯教室を、児童館や小学校で定期的実施しています。プログラムの内容は私たちが企画するのですが、どんなことをしたら楽しく防犯を学べるか、どうしたら喜んでもらえるか、そんなことを考えながら活動しています。

活動しているうちに、県警さんや児童館の方など地域の大人たちは私たち学生に対して「勝手にやれ」というスタンスではなく、寄り添ってサポートしてくれていることに気がつきました。例えば、地域の防犯教室のボランティアをされている大ベテランの方たちが、わざわざ私たちの活動を見に来てくれることがあります。そ

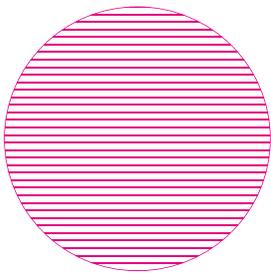


の際、「防犯教室はこうあるべき」という意見ではなく、「もっとこうしたらいい」とか「私たちにはできない、大学生らしい声掛けができていいわね」などのアドバイスをもらい、とても勇気づけられました。

また、活動後には毎回大学に戻り、学生だけでなく運営に関わった大人たちも参加する反省会をおこなっています。「もっとこうすればよかった」「あのときに子どもたちが楽しそうだった」など、お互いの気づきや想いを話し合う、大切な時間です。本来、児童館は0歳から18歳未満が利用する施設ですが、私たち大学生にも「学びの場」として開いてくださっているからこそ、このような様々な立場の人が関わり合う活動が実現しているのだと思います。この活動を通じて、地域と関わり合う楽しさと大切さを身にしみて感じています。

私たちの団体メンバーは、様々な学部の人が集まりで、防犯教室に参加しようと思ったきっかけもそれぞれです。子どもが好きだからとか、就活に役立ちそうだからとか。私の場合は、警察官という仕事が気になっていたからという理由です。最初の入り口はみんなそれぞれで、防犯やまちづくりへの興味や関心も実は低かったのではないかと思います。そんな始まりでしたが、毎回のミーティングが楽しく、気がついたら1年間継続していました。そして、徐々に、「このまちのために何かしたい」という同じ志を持つ集まりになってきたと思います。

色々異なる人たちが参画して、一緒に考え、学び合う時間がこの場に生まれる。地域でまちづくりに取り組むにあたって、理想の形だなと思っています。今、ここにいる私たちは、長久手市の今後のまちづくりのために立ち上がろうとしています。この活動がもっと外に広がっていくといいなと思います。最初は興味がなくても、少しのきっかけで、まちづくりに関わりたくなる人も増えるはずだと思うからです。私たちが活動できる場所はきっとたくさんあるので、今後もっとたくさんの人に知ってもらえる機会をつくっていきたいです。



愛知淑徳大学

2017年8月4日(金)第2回4大学合同学生ワーキング(愛知淑徳大学)にて

CCC学生スタッフの取り組み 02

桑山千香子さん

愛知淑徳大学交流文化学部交流文化学科2年

日本語が苦手な外国人の子どもたちに
声を掛けてみよと思える社会づくりを、
この地域で実現したいです。



私は、外国人の子どもに関わる活動をしています。きっかけは、高校生のときに、私たちの学校にいらした青年海外協力隊の方の話を聞いたことです。それが世界の現状を知る機会になり、もっと世界を学びたいと思い、大学を選びました。大学では、国際協力だけでなく、同じ地域に暮らす外国人住民との多文化共生について学び始めたことから、今の活動に参加するようになりました。

愛知県の公立小中学校には、日本語がわからない外国人の子どもたちがたくさん在籍しています。その数は全国第1位です。そこで、私たちは「アミーゴ」というボランティア団体を大学生で作り、同じ地域で暮らす外国人の子どもたちとその家族を対象に、ボランティア活動をしています。この活動がなぜ必要かという、日本語がわからないことで高校に進学できない、将来に対して夢が持てない、保護者に日本の学校についての情報が届いていないなどの問題があるからです。

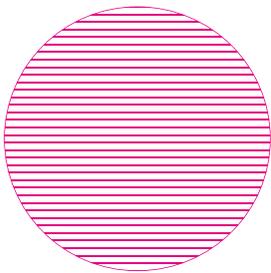
2017年度は、公立小学校に通っているけれど、日本語がわからずに学校の勉強に自信が持てないという子どもたちを対象に、多読を通じて日本語を学ぶ機会を増やそうという活動をおこなっています。この活動は、外国人児童と私たち愛知淑徳大学生がペアになり、子ども自身が読んでみたい本を図書館で選びます。そして、同じ本を一緒に読み、読めないところや意味がわからないところなどを大学生がサポートし、読み終わったところでお互いの感想を言い合います。

子どもたちは「こんなふうに読んだよ」と教えてくれたりするのですが、ルーツが違うだけで、私たちとはこんなにも感想や意見が違うのかと驚きます。そのため私は、国や生まれた地域が違うことで、様々な考えや意見があるということを学びました。本を通じて、私たち学生はたくさんの交流ができ、子どもたちは日本語で本が読めたことを喜んでくれる、とても楽しい場です。ただ、外国人の子どもたちの背景は、一人ひとり異なりま



す。なので、どうやって彼らと寄り添えればいいのか、いつも考えながら「アミーゴ」の活動をしています。

この子どもたちは「日本語が苦手」というだけで、日本人から距離を置かれがちです。私自身は近所の人から「どこ行くの?」とか気軽に声を掛けてもらえるのですが、彼らは外国人というだけでそうした機会が少ないという現状を、このボランティア活動を通じて知りました。外国人の子どもたちのために何ができるかを考え、声を掛けてみようと思える社会づくりが大切です。それを、この地域で実現したいです!



愛知淑徳大学

2017年6月28日(水) 第1回4大学合同学生ワーキング(愛知医科大学)にて

ゲストトーク 先輩たちによる地域連携の取り組み

藤本涼子さん 愛知淑徳大学交流文化学部卒 岡崎市役所退職後、名古屋YMCA勤務

櫻木悠平さん 愛知学院大学経営学部4年 AGUボランティアセンター、
リコモ沿線合同大学祭実行委員会代表

司会:小島祥美先生(愛知淑徳大学交流文化学部交流文化学科准教授)

ボランティア活動を通じて一番学んだことは、

人の想いに寄り添うことの大切さです。

(藤本涼子さん)

地域の方々と学生のつながりをつくり、

万一の災害時にもお互いがお互いを助け合えるように。

(櫻木悠平さん)



小島:藤本さんは卒業して2年たちますが、学生時代はどんなボランティア活動をしていましたか?

藤本:長久手市内の農家さんと一緒に、有機栽培でお米づくりにチャレンジするというボランティアで、いわゆる食育活動。これが私の入り口でした。

小島:きっかけは、どのようなことからでしたか?

藤本:愛知淑徳大学内にコミュニティ・コラボレーションセンターという、ボランティアの情報を探したりできる場所があるのですが、入学して10日もしないうちにそこへ行って(笑)。スタッフさんから「こめ☆こめくらぶ」という大学生のボランティアサークルを紹介され、最初は田植えに行ってきました。

小島:それまで田植えとか、ボランティア活動は?

藤本:高校3年生のときに勉強していたものの、実際にしたことはなくて。高校卒業間際には、大学生になったら絶対にボランティア活動で地域に飛び出すぞ!という想いが強くなっていたので、入学後すぐに行動につながったと思います。

小島:それ以降は、どのような活動をしていたのでしょうか?

藤本:子どもたちの生き物教室のボランティア活動など、たくさんあって思い出せないのですが、大きなもの



では名古屋コーチンを広める「名古屋コーチン盛り上げ隊」と、奥三河の設楽町で地域活性を目指す地元の人と一緒に、ニーズに沿った活動をする「きらきらしたら」です。

小島:その設楽町での活動をするのに、確か大学を休学しましたよね。

藤本:はい、1年間休学しました。「地域おこし協力隊」という総務省の制度を活用して、住民票も現地に移して、実際に暮らして、生の声を聞くことを大事にして、1年間活動しました。

小島:ボランティア活動を通じて、どのようなことを学びましたか？

藤本:一番学んだことは、人の想いに寄り添うことの大切さです。自分の周りには素晴らしい人たちがいて、その人たちの温かな想いに寄り添いながら、チャレンジできるチャンスがたくさんあると知りました。

小島:そうした活動は、進路を考える上でも関係しましたか？

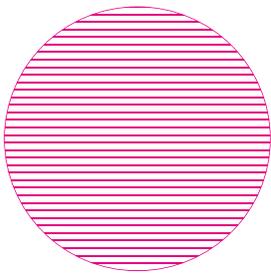
藤本:私が色々活動するにあたって、一番大事にしてきたのは地元の人たちの声なので、地元の人と地域のニーズに応えたいという気持ちで、岡崎市役所への就職につながったと思っています。

小島:今は実際、どんなことをしていますか？

藤本:実は2017年の3月いっばいで岡崎市役所を退職しまして、今は名古屋YMCAのボランティアセンター担当として働いています。自分の能力不足もあるのですが、私が望む地域の人たちとなかなか思うような関わり方ができなくて、こういうところを助けてほしいという人たちに、もう少し近づける場所があるのでは…という想いが少しずつ芽生えて、今に至っています。

小島:お仕事をしていく上で、学生時代の活動は活かされていますか？

藤本:人との関係性を大事にし、想いを聞くという学びは、市役所時代にもこの人は何をしていきたいのか聞き出すスキルに活かされていたと思います。もちろん社会人基礎力と言われる部分は、人との関係をつくり



愛知淑徳大学

ゲストトーク 先輩たちによる地域連携の取り組み

上げていく上でも大事なので、あ、ここで役立ついるなと思う瞬間が、社会人になった今、たくさんあります。

小島: 櫻木くんは「りにさい」の代表ということですが、「りにさい」とはどんな活動をしているのでしょうか？

櫻木: 「リニモ沿線合同大学祭実行委員会」と長いので、略して「りにさい」と呼んでいます。2017年で6年目になりますが、発足のきっかけは、愛知県立大学の先輩たちが、東日本大震災の被災地でボランティア活動をおこなったことからです。そこで、普段からの近所付き合いがあって、人のつながりが強い地域ほど被害が少なく、助かる人が多かったという話を聞いたそうです。リニモ沿線や長久手市内には多くの大学が集まっているので、普段から地域の方々や学生とのつながりをつくり、万一の災害時にもお互い助け合おうということを理念というか想いとして活動しています。

小島: そんな櫻木くん自身は、大学に入学するまでボランティア活動とは無縁だったそうですが、なぜ参加しようとした？

櫻木: 大学入学前、自分のことをクソだと危機感を持っていた時期があって(笑)、とにかく自分を成長させたいと思っていました。そんな想いを、入学後に大学職員の方に話したら、愛知学院大学のボランティアセンターを紹介してくれました。行ってみたら、先輩たちの雰囲気がよくて、初めて顔を出したのにすぐに募金活動に参加することになり、参加したらSNSにあげられ、部員登録する前から新入部員でしょってという空気になって、やめるにやめられなくなりました(笑)。

小島: 活動によって、自分の中に何か変化はありましたか？

櫻木: こうした場に呼ばれる人間になるとは思わなかったのですが、様々な活動を通して、色々な方々とのつながりを大切にしてきた結果かなと思います。そのつながりを大事にすると、また新たなつながりが生まれて、色々な考えや価値観を持っている方と出会う機会ができ、自分の世界が広がっていきますね。もともと人見知りなのですが、いろんな人と触れ合い、ボランティア活動をしていく中で、コミュニケーション能力や行動力、積極性は少しずつ備わっていったのかなと思います。

小島: 活動は忙しいと思いますが、アルバイトなどは？

櫻木: 以前はドラッグストアでバイトをしていたのですが、シフトが固定されて活動に参加できないこともあるので、今は派遣会社に登録して、行けるときだけバイトをして、ボランティア活動を優先にしています。

小島: 藤本さんはどうしていました？

藤本: 私もボランティアしたい気持ちが強かったので、二つ掛け持ちしていたのですが、バイトの日とボランティアの日と決めていました。最終的には自分の中でバランスがとれていたとは思いますが、バイトで活動

に行けないこともあって、チャンスを逃してきた悔しさは今もあります。

小島: 櫻木くんは今4年生ですが、進路はどう考えていますか？

櫻木: ボランティア活動とか学生団体での地域活動をしてきたので、それを生かせるような仕事や職につければと思っています。

小島: そうした活動にチャレンジしたいと思っている学生さんたちに、何かメッセージをお願いします。

櫻木: 自分も何となく始めて、気づいたらこういう形になっていたの、最初の一步は何でもいいと思います。楽しいから、友だちに誘われたから、先輩がいい感じだから…でいいと思いますが、そこで終わるのでなく、ご縁をつなげてください。皆さんも、今日こういった機会があって一步踏み出したので、さらに色々な方とつながり、様々な社会や地域の問題から学ぶことで、自分の成長や今後の人生の糧になると思います。

藤本: 櫻木くんが言うように、入り口は何でもありです。ボランティア活動から得られることはいっぱい、私も工夫するということを得ました。困難にぶつかったとき、色々な角度から物事を捉えられる力がついたと感じています。ボランティア活動は学ぶことも多いし、人という財産をゲットできるし、他にも得られることはいっぱい。たくさんチャレンジしてもらえるといいなと、いつも思っています。

小島: 最後に、学生たちが大学連携の活動をするにあたって、関係者に考えてほしいこと、知っていてほしいことなどあったら、お願いします。

櫻木: 社会経験のない中で、こういった活動をしている学生もいるので、まずは温かい目で見守ってもらいたいです。つっこみたい部分が多々あると思うのですが、ミスできる環境を大人の方々につくっていただくと、学生も新しいことに飛び込めるし、活動にも参加しやすくなると思います。

藤本: 時間はあるけどお金がないというのが学生の現実で、私も交通費とか援助してほしいなと感じていました。あとはいつもミーティング場所に困っていたので、4大学で集まれて、ボランティア活動の情報もあって、1人でも気軽に入れる拠点のような場所があるといいです。学生にはどんなことが学びになるのか、このためには何が必要なのかとか、考えながらサポートしていただくと、学生も「すぐにやれるかも」という気持ちにつながると思いますので、何卒よろしく願いいたします。



愛知淑徳大学

2017年8月4日(金)第2回4大学合同学生ワーキング(愛知淑徳大学)にて

ゲストトーク 長久手市における地域連携の取り組み

大原由恵さん NPO法人 楽歩 副理事長

都築康成さん 愛知淑徳大学福祉貢献学部福祉貢献学科卒業、長久手市役所勤務
司会:小島祥美先生(愛知淑徳大学交流文化学部交流文化学科准教授)



子ども、高齢者、障がい者のことなど、

みんなが自分のこととして考えられる社会になっていけばいいなと思います。

(大原由恵さん)

長久手市のまち全部がキャンパスだと思って、

学生さんたちにはまちを学びの場にしてほしいです。

(都築康成さん)



小島:大原さんは、長久手市でどのような活動をされているんですか?

大原:障がい者の就労支援をしています。今の社会はできることを伸ばしていこうというより、できないことにスポットが当たってしまいがちですが、そうではなく、それぞれのできることをたくさん集めたらいいのではないかというのが、私たち楽歩の考える「働く」ということです。例えば農業は、種を蒔く人、苗を植える人、水をやる人、それに田んぼだと水が入っているかどうか見るだけの人もいる。色々な仕事があるので、この人にはどんな仕事が向くかなと一緒に考えていきます。この方法通りにしてくださいという指導ではなく、共に働く仲間として、その人がどうしたら働きやすくなるか、あるいはいいところを見つけてその人に合う仕事を考えたりしています。

小島:なぜ、こうした活動を始められたのでしょうか?

大原:私自身は福祉の世界に入ってまだ日が浅いのですが、もともとの「楽歩」は、この地域には障がい者の支援があまりなく、働き先や居場所がなかったため9年前に設立されました。今、この長久手市に住む障がい者の中で、地域に出られている方は全体の2割くらい。在宅の方が結構多く、家族も「家にいてもらって構わない」という考えだったりします。本人は地域に出たくないと思っているわけではないのですが、地域も受け



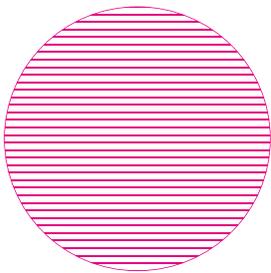
入れる状況でないと、なかなか家から出ることができない。でも、私たちももし自分の身体が不自由になったとき、階段が昇りづらかったら、扉が開けづらかったらどうするの…というところから、いずれ自分がそうなったときにも暮らしやすい社会であるよう考えていこうと思いました。

小島:「子ども食堂」の活動もされていますが、これはどんなきっかけから？

大原:2017年の7月で3年目になりますが、きっかけは、地域の方から「夏休みが終わると痩せて学校に来る子がいる」と聞いたことでした。長久手市にもある問題とは思わず、「給食で栄養をとっているからだよ」と理由を聞いて驚きました。そんなころ、偶然「子ども食堂」という取り組みを知り、この活動ならできそうだと始めました。チラシやポスターで告知をしたら、17人集まりましたが、特に困っている子たちではありませんでした。でも、「子ども食堂」を続けてわかったのは、困り事は本当に色々で、食事ができない子だけでなく、実はお母さんも悩んでいたりするということ。急に人口が増えた長久手市は、お母さんたちもよそから来た人で、話し相手がない。子どもに話し掛けてくれる人も、挨拶する人も少ない。子どもを取り巻く問題は、子どもだけではなく家庭、地域など、本当に様々な理由があるのだと、活動を通して初めてわかってきました。

小島:最近では、この地域の団地も訪問していると聞いたのですが。

大原:本当に困っている子がいるのでは…というところから始めたのですが、そもそも長久手市にいらっしゃるかという気持ちもあって、2016年に長久手市の保育士さんを対象にアンケートをとりました。「自分たちの保育園に来ている子たちで、朝食を食べていないと思われる子はいますか?」「季節外れの服を来ている子がいると思えますか?」「病院とか歯医者さんに通院していないと思われる子はいますか?」と、先生に直感的にお尋ねしました。すると、朝食を食べていないと思われる子は15%で、季節外れの服を着ていると思われる子は25%、病院などにかかっていないと思われる子は27%もいる。あまり実感としてなかったのですが、新



愛知淑徳大学

ゲストトーク NPOによる地域連携の取り組み

しく人が入ってきて、中には様々な悩みを抱えている人たちもいて、だんだん問題も増えていくかもしれないという危機感を感じさせる結果でした。それで本当に困っているのはどこか、アンケートから地域的なことが見えたので、実際にそこに行くと、苦労していることや困っていることが少しずつ見えてきました。

小島:そうした活動の中から、これからの若者たちに願うことはどんなことでしょうか？

大原:まず何か始めてみることに。始める前は不安なこともいっぱいあるかもしれないけど、仕事ではないし、もしうまくいかなかったら違う方向に進めばいい。続けなければかっこ悪いわけでもなく、自分の考えが変わったら変えてもいいし、まずやってみることに。ここにいる皆さんは、既に活動を始めていたり、やってみたいことがあったりすると思いますが、その想いを次の人に伝えてください。仲間をどんどんつくっていくと、自分が必要とするときにも助けてもらえる社会ができています。

小島:今日は愛知淑徳大学の卒業生もお呼びしているので、彼からも話を聞きたいと思います。

都築:2014年に卒業して、現在は長久手市役所に勤めています。

小島:豊田市在住ということですが、なぜ長久手市役所に？

都築:きっかけはボランティアです。同じ学部生の大半が「あじゅあす」というヘルパーサークルに入っていたので、僕も大学2年生のときに参加しました。メンバーは女子ばかりで男子は珍しく、入った瞬間に部長になって(笑)。ここでしていたのは、重度の知的障がい者や障がい児の方のヘルプです。一緒に買い物に行ったり、施設に行ってイベントをしたり、ボランティアをしたりしました。そのとき感じたのは、勉強ができて福祉の知識のある人が現場で一番役に立つわけではなく、相手に合わせてよく動ける人がその場で一番輝いていたこと。僕は勉強が苦手だったので(笑)、そこが面白いと思い、以後、様々なボランティアに参加し、長久手市の事業や「ながくて冬まつり」の実行委員も自分から応募してやっていました。

小島:確かに、ボランティアしている都築くんは、大学の授業時と違って、いきいきとしていました(笑)。

都築:当時、近隣のボランティアの部長が集まる会議があって、隣席が愛知県立大学の学生だったのですが、東日本大震災の被災地に行ったとき、被災者さんから「役に立ったのは行政のシステムではなく、近所同士のコミュニティ」と聞いたそうです。東海地方にも大きな災害が起こると予測される今、リニモ沿線にはたくさん大学があるので、学生がリニモ沿線を盛り上げ、プラスまちに暮らす方同士で助けを求め合えるまちにしたいと、みんなで「リニモ沿線合同大学祭実行委員会」というサークルをつくりました。その活動をしているうちに長久手市内に出掛けることが増え、次第にこのまちに愛着が湧き、このままここにいたいなあと今に至っています。

小島:そこまで長久手市を好きになってしまった理由は？

都築:長久手市に通学しているといっても、それまでは大学内にしかいませんでした。それが、ボランティアを始めたら急に活動範囲が広がり、だんだん自分の地元のように思えてきて、知れば知るほど好きになりました。

小島:そんな経験をしてきた都築くんが、学生たちに伝えたいことはありますか？

都築:このまち全部がキャンパスだと思って、学びの場にしてほしいです。特に長久手市は今、学生の力を生かしたいと大きな扉を開いているので、そこにどんどん踏み込んでいけば、自分にとってもいい体験ができると思います。

小島:お二人がお仕事をしていく中で、一番大事にしていることは何ですか？

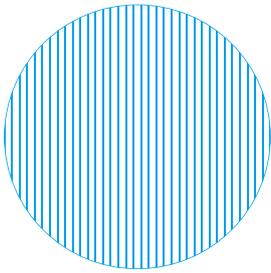
都築:ユーモア(笑)。面白く過ごしていた方が、やっぱりいろんなことがうまくいきます。

大原:目の前にいる人のことを一生懸命考える人になる。誰かが困っていたら、一緒に考える人でありたいです。

小島:今後、チャレンジしたいことはありますか？

都築:今は仕事だけをしている感じなので、学生時代に一緒に活動していた人たちと、もう一度何かやってみたいという想いが最近出てきました。仕事とは別にプライベートで、地域貢献とかしてみたいです。

大原:子ども、高齢者、障がい者のことなど、みんなが自分のこととして考えられる社会になっていけばいいなと思っています。なので、一生懸命色々な努力をしている人たちの応援をしながら、自分の目の前のことだけでなく、地域が変わっていくための協力をしていきたいと思っています。



愛知医科大学

2017年6月28日(水) 第1回4大学合同学生ワーキング(愛知医科大学)にて

愛知医科大学の地域連携

川原千香子先生

愛知医科大学医学部シミュレーションセンター講師

地域住民および近隣大学生の健康増進、
疾病予防に貢献することが、
私たちに与えられている使命です。



愛知医科大学には、医学部と看護学部の2学部があります。どちらも医師、看護師という職業者養成の場で、基本的にはかなりカリキュラムが過密です。

そうした中、2016年度には、長久手中学校や南中学校で行われた「命の学習講座」に看護学部の教員や学生が参加した他、子育て支援や学生ボランティアにも行かせていただきました。また、医大祭での防災セミナーや、「HIAMU」という学内のボランティアサークルが「三世代交流ダンス」に参加しており、これらが長久手市との交流です。地域の市民向けに積極的に活動しているかというところ、そこはまだまだ今からというところではあります。

医学生、看護学生が一番の大きな特徴は、長久手市をはじめ近隣にある病院や医院、さらには介護施設・福祉施設に実習に行かせていただいているということです。つまり、何かを提供するというよりも、我々が学習させていただくというつながりが、大きいのではないかと考えています。

今、医療の中で何が問題視されているかというと、重度な要介護状態になっても、住み慣れた地域での自分らしい暮らしを目指す「地域包括ケアシステム」です。医師、看護師、医学生、看護学生は、今まで病院の中で何を学ぶべきかを学ばなければいけなかったのですが、今後はどんどん地域に患者さんを帰していかなければいけません。病院の中でできることを、そのまま生活に持っていけるかどうか看護学生は考え、医師はというと、例えば患者さんが飲んでる薬をそのまま家に持ち帰らせていいのか考えなければならない時代になってきました。病院ありきの医療ではなくなったというのが、我々医療の立場から見る地域の特徴だと思います。

では、医科大学として何ができるかというと、長久手市は若さが特徴ですので健康維持を促進していくため、予防という観点での医療が必要ではないかと思っています。他にも、病気を抱えている人たちの生活に対し

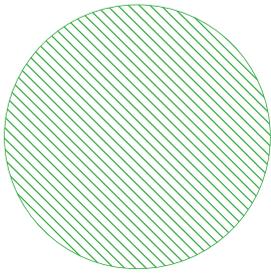


での支援やご家族への支援など、医療の観点からできるといいのではないかと考えています。

ところで、他の3大学の皆さん、もし地震が起きたら大学に孤立してしまうと心配になりませんか。医学生、看護学生は、自分たちが学習していること、災害が起きたときに何ができるかを、皆さんに伝達できると思います。そして我々が常に考えているのは、医学生や看護学生が出向いて何かをするだけでなく、それを各大学の中でどんどん広げていただけるようなシステムをつくること。何万人という学生・市民の人たちが助かるよう、考えていきたいと思っています。

そのため、今後検討している活動がいくつかあります。一つは学生による住民や学生に向けた応急手当や心肺蘇生講習。各大学の学生が自大学の学生に指導できるよう、私たちは指導者を養成する側に回りたいと思っています。次に、学生による学生のための健康教室。アルコールやタバコなど目の前にある問題を学生同士で考える上で、イニシアチブをとっていければと思っています。また、学生企画による小中学生向けのオープンキャンパスや、各大学の皆さんに災害時のトリアージを体験していただくなどしていきたいと思っています。

愛知医科大学の理念に基づいて、地域住民および近隣大学生の健康増進、疾病予防に貢献することが、私たちに与えられている使命です。医学生、看護学生は医療を学ぶ者としての責任を自覚し、モチベーションを向上するために、皆さん3大学のお力を借りたいというのが正直なところですが。特に医学生は医学という箱の中にいるので、基本的には就職活動というものがあまりありません。コミュニケーション方法や社会常識など、勉強しないで済んでしまうという一面があります。他大学の皆さんと共に活動して行く中で、何か学んでいけるのではと教員として期待しています。他大学の皆さんの力も借りながら、長久手市に何か提案できればと考えていますので、よろしくご指導いただけたらと思います。



愛知県立芸術大学

2017年9月23日(土)第4回4大学合同学生ワーキング(愛知県立芸術大学)にて

長久手市における環境視覚伝達デザインの取り組み

佐藤直樹先生

愛知県立芸術大学美術学部デザイン・工芸科デザイン専攻准教授



始まりは“N-バス”から。

今後も地域のために、

良好な関係で連携していきたいと思います。

長久手市との地域連携の取り組みは、1997年から。当時は長久手町でしたが、まさに私がこの大学に赴任した年に始まりました。現在は美術学部学部長の白木彰先生のもと、「せっかく長久手町に芸術大学があり、デザインの研究室があるので、色々な事業に関して楽しいことができないだろうか」と相談があり、赴任したての私も参加することとなって、以後20年にわたり様々な事業をしています。

最初は、1998年に運行が始まった「N-バス」です。今でこそ、全国の自治体に800以上のコミュニティバスがあるそうですが、当時はまだ珍しい存在。東京都武蔵野市の「ムーバス」というシティバスが先駆けとなり、それを追うように長久手市もコミュニティバスを導入しました。そこで、車体に色を塗ってほしいという要望だったのですが、白木先生が「それだけではつまらない、全部やりましょう」と、バスの外装だけでなく、バス停、時刻表など、運行に関わる全てのデザインを引き受けることになりました。以来、白木先生がアートディレクターで方針を示し、僕がデザイナーとして関わるという関係が続いています。

2018年には、運行20年。第1号は現在のバスより大きめの車体で、このグラフィックは、色とりどりの色々な幾何形体を自由に組み合わせることによって表現しています。このデザインの利点は、様々な方向に展開可能ということ。シンボルマークのようなデザインは、わかりやすい反面、展開性がありません。幾何形体の組み合わせなら、自由自在です。細い所も広い所も、丸い面にも地面にも、天井にも壁面にも展開していけます。

積み木のように発展するグラフィックとして最初に提案すれば、次にはどんなものでも展開可能です。なので、車椅子ユーザーの方も利用できる軽自動車の「N-ミニ^{※6}」も、「N-バス」のデザインを踏襲しながら全く同じデザインではなく、それにふさわしいパターンを選択しています。バスや軽自動車だけでなく、職員さ

※6 N-ミニ:当初は車椅子ユーザーの方の移手段として利用されていました。



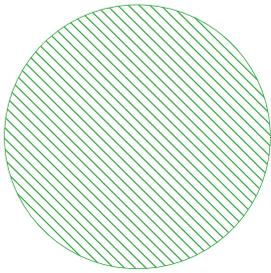
んの名刺、リサイクルボックス、地域振興券やその取扱店のステッカー、色々展開できます。それらが好評を得たので、長久手町のシンボルロゴから、2001年の「長久手町制施行30周年」のロゴまでつくりました。実に色々な展開ができる。自由自在が一番のメリットだと思います。

また、長久手町役場からは封筒のデザインも依頼されました。役場には様々な部署があるので、3年か4年の間に100種類ほど手がけたと思います。また、「福祉の家」が設立されるにあたり、そのシンボルマークも温かな心をイメージしてつくりました。そこに付設している温泉、「ござらっせ」のシンボルマークなども手がけています。

2005年に「愛・地球博」開催が決まり、町内に「ウエルカムながくて」という看板を立てることになりました。看板には様々な形がありますが、色と形のパターンがあれば、形にとらわれることなく、自由に展開できる。当時、町内にはこの看板がずらっと立っていました。開幕を告知する、モリゾーとキッコロのついたステッカーもデザインしました。このステッカーをクルマに貼っている人も多かったです。

そして2006年には、長久手村から数えて誕生100年という事業があり、そのシンボルロゴも作成しました。白木先生と私の案、2案提出したら、どちらも採用になりました。長久手市さんがユニークなのは「いいですね、これも使用させてください」と面白がって、ひゅっと受け入れてくださるところ。我々としても、仕事していてとても楽しいです。

2006年には、水津先生と一緒に「長久手町平成こども塾」を手がけ、サインボードを丸太でつくりました。そして翌年には「あぐりん村」。このときは、ロゴとキャラクターも作成しました。そして、「長久手町とワートルロー市交流提携15周年記念」のシンボルロゴ。ワートルローの戦いで有名なベルギー王国のワートルロー市は、古戦場つながりで長久手市と姉妹都市だそうです。これも2案提案したら、「どちらもいいので二つつく



長久手市における環境視覚伝達デザイン

愛知県立芸術大学

りましょう」とおっしゃる。シンボルマークは普通一つですが、慣例を気にしないでどんどん試みる柔軟性が面白いです。

2007年に始まった「ながくてアートフェスティバル」は今も続いています。シンボルマーク、ロゴなどを作成しています。それから、「リニモ」のラッピングデザインも担当しました。「リニモ」は長久手市の直轄ではありませんが、「N-バス」と絡めたデザインを意識した部分もあります。

今走っている2代目の「N-バス」は、少しデザインを変えました。それから「第5次長久手町総合計画」のシンボルロゴ、それから2012年に長久手町から長久手市に移行したので、テーマカラーを以前より少し落ち着いた色合いにしたロゴマークにしました。町から市になって、少し大人になったというイメージです。そんな色展開で、市の境界に立てる「Hello!」「See You!」と書かれたウエルカム看板も変えました。最近では、ハイエース仕様の「N-バス」、長久手市消防本部から依頼された「火災予防標語横断幕」を手がけています。

本日お話したのはごく一部ですが、このようにグラフィック研究室は長久手市さんから声を掛けていただき、それに対して我々は色々なアイデアを出し、面白がりながら応えるということで、様々なグラフィックデザインを提供してきました。まちを良くするための提案をし、それが受け入れられ、非常に良好な関係ができたと思います。良いデザイナーはもちろんです。良いクライアントがいないと良いデザインは成立しません。今後とも、地域のための連携をしていきたいと思っています。



N-バス



2017年9月23日(土)第4回4大学合同学生ワーキング(愛知県立芸術大学)にて

長久手市における環境デザインの取り組み

水津功先生

愛知県立芸術大学美術学部デザイン・工芸科デザイン専攻教授

良いデザインを生むには、
全体の半分を専門家が考え、
残り半分はみんなで考える必要があります。

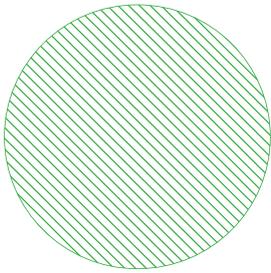


長久手市内での活動の一つに、「あいちサトラボ」があります。モリコロパークの中にある2ヘクタールのスペースを、愛知県と一緒に里山づくり活動をおこなうエリアにしました。場所が長久手市内なので、長久手市の農家の方にご協力いただいています。当初はがれきだらけで、一体ここで何ができるのかという場所でしたが、愛知県が「県民の自主的なアイデアでやりたいことをしてもいいよ、それを応援するよ」と言ってくれたので、やりたいことのある人たちが40人ほど集まり、みんなで話し合いをすることになりました。

始まりは2007年で、私は造園のディレクションで10年間関わっています。最初は何をしようかという話し合いから始まり、もう喧々諤々。万博の記念館のようなものをつくりたいとか、科学技術の展示がしたいとか、色々な意見が出たのですが、最終的にみんながやりたいと言ったのは、当時テレビで流行っていた「ダッシュ村」でした。里山を色々な実験ができる場所にして、それを自分の地域に持ち帰って役立てたい。そんな意見をまとめるまでに約2年間。そしてそれを実現するために、公園設計から始まり、最低限の工事をするまでにだいたい4年かかりました。

それからの3年間は準備期間です。みんなで農作業をおこなうのですが、集まっているのは経験のない人ばかり。石ころだらけの場所に何が育つのか、最初は「ソバを植えて、収穫したらうまいじゃないか」という勢いから始まり、長久手市の農家さんに田んぼの土を分けてもらって入れました。それと同時にアドバイスもいただき、育て方を教わりました。

こんな経験不足な状態にも関わらず、水田がやりたいという発言が出て、そんな急にできるわけがないと思ったのですが、インフラだけは整えようということで、一番奥の谷津をせき止めたら池ができた。この池の水を使って稲作をやることになり、失敗をしながら、また農薬を使う使わないの議論などしながら、見よう見



長久手市における環境デザインの取り組み

愛知県立芸術大学



まねで農作業を行いました。

すべてが手探りで、ゼロから里山の活動を体験し、そしてそれを自分たちの行動の糧にしたい。「あいちサトラボ」は、そんな人たちの実験の場です。場所は愛知県営の公園内で、事業としても愛知県ですが、長久手市の協力なくしてはできません。長久手市内の実際の里山の農家の協力があって初めて実現できることで、現在も有志によって続いております。最初は何もなかった場所に、今は田や畑、湖があり、山の管理をして出た材木や枝を利用してここを豊かにするなど、全体を循環させるという目的もあります。

では、この活動の意義は何か。市民あるいは県民は、こうした場を使うユーザーですが、ユーザーは与えられるだけでは満足できません。愛知県が全て用意して、「さあ、皆さん使ってください」というのではなく、やりたい人が自主的にやりたいことを自分で責任を持って楽しむ。あるいは、自分たちが必要な情報や人間を自ら集める。設計にも計画的に「余白」を盛り込むことで、参加性や満足度が高まります。使う人の自主性を高めるためには、公共施設としてどうしたらいいか、そんな大切な試みとしてこの「あいちサトラボ」がおこなわれています。

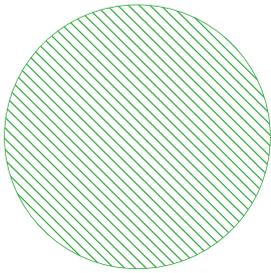
それからもう一つ、長久手市との連携に「環境デザイン夏季講座」があります。これは、愛知県立芸術大学デザイン専攻の4年生の授業に組み込んだゼミです。その年のテーマである市町を1カ月半ほどかけて調査し、歴史、地理、産業などから資源の発見と同時に問題の抽出をし、それらの解決策を考えます。そして、行政の方の前でプレゼンテーションをするのですが、去年は長久手市に愛知県内の市町職員の方30人ほどに集っていただきました。長久手市の問題提起からその解決、デザインの提案まで行う学生にとって、長久手市長や職員の方から、直接感想や意見が聞ける貴重な機会になっています。

長久手市以外での地域連携では、名古屋市内の本山交差点のデザイン、碧南市内の廃線になった線路を

細長い公園にするデザイン計画などがあります。碧南市の場合、どのような公園にするか市民参加で皆さんの意見を聞きました。通常なら、集まった意見を抽象的な言葉に置き換えて、設計者が勝手に設計することになる。そうではなく、市民の要望を受け止めるため、皆さんの意見と我々の意見を、その場その場で模型にするというワークショップをおこないました。これには1年かかりましたが、1年たったところで計画の模型ができあがっていました。それが基本設計になり、市民の要望を形にしているということで、議会での質問に対しても、模型が役に立つというのは新しい方法だと思います。2017年は遊具のデザインもして、それでこの公園は完成になりますが、本学としても地域に関わることによって、地域に個性的なデザインが展開されることを期待しています。

現在、平均年齢の低い長久手市も、今後は高齢化社会を迎えます。最近、栃木県の高齢者施設を設計したのですが、これからは高齢になったときに、居心地のいい空間で生活できるように設計することが重要です。この栃木県の施設では、本学の彫刻科の学生に門柱をつくってもらいました。1カ月ほど現場に泊まり込み、皆さんが住んでいる中に音を立て、真っ白な粉を巻き上げながら。でも、できていく過程を皆さんが見守ってくれ、完成時には喜んでお祝いしてくれるような雰囲気でした。ものをつくるのが、そこに住む人たちの喜びにつながっているところが、ただの工事ではない。アートスクールの学生がやっていることは、完成したものを鑑賞するだけでなく、実はつくっている過程に大きな価値がある。それが実現できました。

そういう意味では、愛知県立芸術大学には資源がいっぱいあります。僕はデザインとは、半分は問題の発見、半分は問題の解決だと考えています。長久手市との連携も、まちの中にどんな資源や問題があり、どんな取り組みが可能なのかを見つけ、そして選ぶ。ここまでは一般の人にもできます。それが決まったら、今度はそれを解決するためにどうすればよいか。これはかなり専門的な分野になりますので、我々がお膳立てをして、特殊な検討を色々重ね、良いコンセプトを出していく。全体のデザインのうちの半分は専門家が、半分はみんなと一緒に考えるのがいいと思っています。僕は教える専門家ではなく、一緒に考える専門家として、共に勉強していきたいと思っています。



愛知県立芸術大学

2017年9月23日(土)第4回4大学合同学生ワーキング(愛知県立芸術大学)にて

長久手市における音楽による地域連携の取り組み

安原雅之先生

愛知県立芸術大学音楽学部音楽科作曲専攻音楽学コース教授

“ホーム”である大学だけでなく、
学生にとって長久手市は
実践的な活動の場になっています。



長久手市において愛知県立芸術大学音楽学部がおこなっている音楽活動を、地域連携という視点からご紹介したいと思います。まず、今日は「ヴェニュー」という言葉をキーワードにお話したいと思います。これは英語の単語で、辞書の意味でいうと「会場場所」とか「開催地」、「場所」ということになります。日本語にはぴつたりする言葉がありませんが、「於ける」の「於」という漢字が一番近い言葉かもしれません。

愛知県立芸術大学音楽学部の「ヴェニュー」としては、主にどんな所があるかということ、まず学内にある「奏楽堂」と「室内楽ホール」。それから教室をホールとして使う場合もある。また、「長久手市文化の家」という「ヴェニュー」があります。名古屋市の中心の方に行くと、愛知芸術文化センターのコンサートホール、電気文化会館コンサートホール、しらかわホール、そして名古屋市の各区の文化小劇場などもあります。

地域連携の視点から、まず“ホーム”である大学からご紹介すると、「奏楽堂」は音楽教育、入学式や卒業式など大学行事に使用される施設です。大きなパイプオルガンがあり、入学式や卒業式などの際に演奏されます。大学のコンサートを行う場所でもあり、2017年9月16日には「愛知県立芸術大学管弦楽団ポピュラー・クラシックコンサート」が開催されました。これは毎年この時期に行われるもので、固定ファンもいらして、近隣の方が毎回来てくださいます。このコンサート、実はここで開催するのは2017年が最後で、来年度からは「文化の家」で開催することになっています。他に「奏楽堂」で毎年開催するのは、「芸祭オペラ」。11月の「芸祭」という大学祭で行う、学生主体のオペラです。これも固定客がついていて、私もスケジュールが合えば必ず観るのですが、いつも面白い演出で行われています。



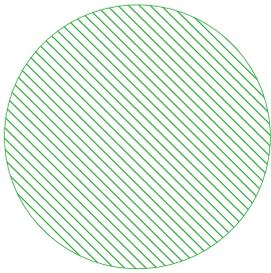
本学のもう一つの「ヴェニュー」である「室内楽ホール」は、音楽教育、演奏会、講座などに使用するための施設で、純粋に音楽のためのホールです。直近では、2017年8月2日にシューマンの歌曲のコンサート、そして2017年7月22日にはアーティスト・イン・レジデンスによるコンサートが行われました。その2日前には卒業生を中心とする弦楽四重奏団のコンサート。2017年7月16日には、カリフォルニア大学サンディエゴ校の先生とこちらの学生が演奏会を行いました。なかなか一般の方に情報が伝わらず、集客が難しいのですが、こうしたコンサートを頻繁におこなっています。

学外の「ヴェニュー」として、まず「長久手市文化の家」がありますが、この施設は長久手市における、愛知県立芸術大学の音楽活動のハブと言っていると思います。本学と「長久手市文化の家」の提携事業は非常にたくさんあるのですが、その中から「室内楽の楽しみ」と「大学院オペラ」をご紹介します。

「室内楽の楽しみ」というのは、「長久手市文化の家」オープン当初からおこなわれているもので、音楽学部の学生にとってとても重要なイベントです。私は毎年オーディションの審査員をしていますが、多数のエントリーがあり、1日ばかりで上位数組を選びます。長久手市定例の音楽イベントとして定着しているようで、2017年9月24日のチケットは完売という人気のコンサートです。

もう一つ大きなイベントである「大学院オペラ」は、毎年12月におこなわれ、声楽の大学院生を中心とするキャストで、オーケストラも学生によって構成されています。そして、舞台装置などは美術学部が担当しています。芸術大学で音楽と美術が一緒になっているところは本学以外にもあるのですが、オペラをこのような形で合同制作するのは極めて希なことで、愛知県立芸術大学が成功しているのは奇跡的と言っているかもしれません。

「長久手市文化の家」が主体の事業に、「おんぱく」というイベントがあります。これには、大学として提携は



愛知県立芸術大学

長久手市における音楽による地域連携の取り組み

していないのですが、私は批評の立場で参加しました。そこで、愛知県立芸術大学の在校生や卒業生がいかに多く関わっているかを知り、非常に驚きました。オーケストラになると、8割くらいは本学の卒業生や在校生だったのではないのでしょうか。様々なイベントが同時におこなわれているのですが、どこに行っても本学の学生が関わっていました。卒業後も長久手市近隣にいる人が多いようで、彼らにとって長久手市は実践的な活動の場のようになっているという状況を、このイベントで強く感じました。

そして、「ヴェニュー」としては、あまり人の目に触れない活動もあります。アウトリーチという「長久手市文化の家」の自主事業で、「中学校であーと」「小学校であーと」という活動です。「であーと」というのは、“出会う”と“アート”を合わせた造語だと思いますが、内容はクラス単位でアーティストと生演奏に触れるプログラム、また、給食時のゲリラ演奏もあります。この「であーと」のプロジェクトに、本学の在校生、卒業生が多く参加しています。

今までは、アウトリーチ事業に直接関わらない形で連携していましたが、2017年度からは「長久手市文化の家」の方に来ていただき、学生にアウトリーチの指導をお願いしています。この活動はなかなかうまく進んでおり、これから体系化していきたいと思っています。

以上、「ヴェニュー」をいう視点で、長久手市における地域連携の取り組みを紹介させていただきました。“ホーム”である大学だけでなく、近くにある市内の施設も大切な活動の場所であり、特に「長久手市文化の家」とは今後さらに連携を強くしていきたいと思っています。

2017年9月23日(土)第4回4大学合同学生ワーキング(愛知県立芸術大学)にて

長久手市におけるメディアデザインの取り組み

石井晴雄先生

愛知県立芸術大学美術学部デザイン・工芸科デザイン専攻准教授

人間界と自然界が接近している長久手市は、
とても貴重なフィールド。
最大限の活動をしていきたいと思います。

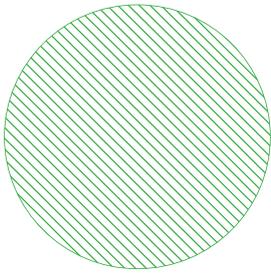


私の専門はメディアデザインで、長久手市でも様々な活動をしています。地域連携の取り組みについて、簡単に紹介させていただきたいと思います。

一つは2014年に立ち上げ、今も運営されているwebサイト「ながくてゆいまある」。長久手市は大きな消費地でもあります、いわゆる近郊農業の生産者さんも多く、とれたての新鮮な野菜が食べられるという非常に恵まれた環境です。それは長久手市の特徴でもあります、こうした市内で近郊農業をされている方、あるいは家庭菜園をされている方を取材し、「ゆいまある」というサイトを通して、農ある暮らしを考えていこうという活動をしています。

次に、毎月1回おこなっている「フォレスト」。これは始めてから10年近くなりますが、愛知県立芸術大学の畑や里山を使っておこなう、親と子の野外活動ワークショップです。長久手市や名古屋市東部の親子が主に参加され、2017年の8月で85回目。100回は続けたいと思っています。





長久手市におけるメディアデザインの取り組み

愛知県立芸術大学

そして、このあと皆さんにも実際に体験していただく「ながくてピクニック」。これは年2回おこなわれ、2017年で8回目になるイベントです。ミュージシャンや料理人、農家、学生などがメンバーで、長久手市内での自然体験を通じて地域交流の場をつくることを目的としています。子どもから大人まで、野外ライブに参加したり、音楽やアートのワークショップをおこなったり、採取した野菜や草花を料理して食べたり、参加者の皆さんと一緒に作るイベントです。

それから「三ヶ峯里山計画」。これは、特段計画してやってきたわけではないのですが、今までの活動を振り返ると「里山」という言葉がキーワードだと思い、改めて里山というキーワードで活動をまとめたものです。里山とは、自然と人の住む領域が交わっている共生の場。人はそこで薪を拾ったり、キノコや木の実を採ったり、縄文時代から人間がつくってきました。完璧な自然ではなく、少し人間が自然界に手を入れた場所。破壊ではなく、かく乱することによって、より自然が多様化して活性化されることがあると思います。愛知県立芸術大学は、里と山、人間界と自然界のちょうど境界。まさに里山じゃないかと思い至り、それまでは特に意識していなかったので、最近では意識的に活動を進め、地域の生態系と暮らしを考えています。

最後に、情報というところでは長久手市観光交流協会のwebサイト「くってながくて」のデザインも担当しています。長久手の歴史から、飲食、芸術鑑賞、暮らしにまつわる様々な地域情報を集めたサイトです。イラストは愛知県立芸術大学の非常勤講師のメツラーさんをお願いしています。

長久手市にはシラタマホシクサ、ハルリンドウ、モウセンゴケなど三河固有の生態系が残っています。その一方で、すぐそこにはリニモが走り、ショッピングモールがあり、人間界と自然界が非常に接近している。こういう土地は珍しいと思います。住宅地で経済的に発展しながら、畑や田んぼもある。そういった貴重なフィールドで、今後も最大限の活動をしていきたいと思っています。



2017年9月23日(土)第4回4大学合同学生ワーキング(愛知県立芸術大学)にて

愛知県立芸術大学の学生による取り組み01 いも部

井上晴菜さん、小谷梨乃さん、西堀菜々子さん、谷澤真央さん、松本野々花さん

(愛知県立芸術大学美術学部デザイン・工芸科デザイン専攻2年)

芝原沙里亜さん、鈴木菜々子さん、安田圭さん(愛知県立芸術大学美術学部デザイン・工芸科デザイン専攻1年)

司会:石井晴雄先生(愛知県立芸術大学美術学部デザイン・工芸科デザイン専攻准教授)

みんなで畑を耕し、

サツマイモを育てるだけでも、

地域とつながりができると実感しています。

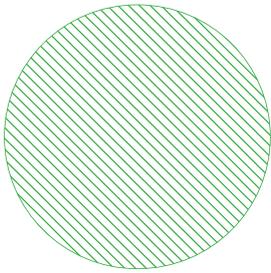
石井:「いも部」は2017年にできたばかりですが、簡単に説明をしてください。

井上:「いも部」は、愛知県立芸術大学の敷地内に畑をつくり、イモを育てる集団です。11月に「芸祭」という大学祭があるのですが、「そこにお店を出して、何か売ってひともうけたいなあ」と思ったことから始まり、そのときにサツマイモを食べたかったから、サツマイモを育てることになりました(笑)。ところが、イノシシに畑を荒らされてしまい、今とても怒っています(笑)。ですが、石井先生のお知り合いの方が長久手市内でサツマイモを育てていらして、10月中旬くらいに掘りに行かせてもらえそうです。長久手市と連携しようとか、地域のことを考えようとか、全く考えていなかったのですが、大学のある長久手市で畑を耕してサツマイモを育てているだけでも、つながりって生まれるんだなと感じました。

石井:西堀さんは、活動してみてどうですか？

西堀:最初は井上さんと二人、気軽な気持ちで「イモ食べたいなあ」と話したことから、「え、畑いいやん!」と周





愛知県立芸術大学

愛知県立芸術大学の学生による取り組み01 いも部

愛知県立芸術大学の学生による取り組み02 LIBERAL

りの人たちも集まってきて、気ままに考えていたことが大きな活動に発展していった、とまどいながらも楽しませてもらっています。

石井:「何げないところから発展していく」ということが、キーワードかもしれないですね。

2017年9月23日(土)第4回4大学合同学生ワーキング(愛知県立芸術大学)にて

愛知県立芸術大学の学生による取り組み02 LIBERAL

吉村淳さん、小西祐矢さん(愛知県立芸術大学美術学部デザイン・工芸科デザイン専攻3年)

下村葉由さん(愛知県立芸術大学美術学部美術科油画専攻2年)

司会:石井晴雄先生(愛知県立芸術大学美術学部デザイン・工芸科デザイン専攻准教授)

愛知県立芸術大学を長久手市内に啓蒙し、

さらには日本全国、

そして世界に発信していきたい。

石井:まず「LIBERAL(リベラル)」から、グループの説明をお願いします。

小西:「LIBERAL」は美術学部を中心としたグループで、僕はデザイン専攻ですが、他に日本画や芸術学など色々な専攻の人が集まっています。愛知県立芸術大学を長久手市内に啓蒙し、さらには日本全国、そして世界に発信していくために、僕たち学生に何ができるかということで、2017年4月の頭に新しく立ち上げました。

石井:どのような活動をしているのでしょうか?

小西:2017年は夏に、「夏季作品展 発信する森」という大きな活動をしました。愛知県立芸術大学内の広大な環境を使い、学生たちが作品展示をするという試みで、結構外部からも多くの方が来ていただきました。「LIBERAL」を知ってもらうために、まず一つ大きな展覧会を企画し、定期的に人を呼ぼうということで屋外展示をおこなうことになりました。今後も続けていきたいと思います。

石井:実際にやってみてどうでしたか?

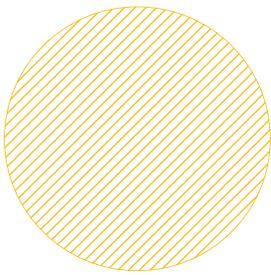
吉村:いろんな地域の方々がたくさんいらしてくださって、地域のつながりという意味で、愛知県立芸術大学に

とっても地域にとっても有意義なことだと思いました。愛知県立芸術大学も長久手市のスポットの一つとして、さらに地域との連携を深めていきたいと思います。

石井: 今後、長久手市さんに対してやってみたいことはありますか？

小西: 今、LIBERAL内で会議を重ねていて、どんなことをしようか話し合いをしています。できれば長久手市全体を使った展示ができないかなと考えていて、展示の内容など少し課題はありそうですが、計画をしている段階です。





愛知県立大学

2017年9月20日(水) 第3回4大学合同学生ワーキング(愛知県立大学)にて

愛知県立大学の学生による取り組み01 DoNabenet inあいち

永井杏さん

愛知県立大学教育福祉学部社会福祉学科4年



鍋を囲むと仲良くなりやすい。

異世代交流から食育、そして防災や減災へと、
地域がつながるきっかけをつくりたい。

私たち「DoNabenet inあいち」の紹介をさせていただきます。今日も皆さんの前に鍋を用意したのですが、私たちは地域の方と鍋を囲み、食事を通して「地域のつながり」のきっかけをつくる活動をしています。2、3カ月に1回食事会を企画して開き、お子さんからお年寄りの方まで一緒に鍋を楽しんでいます。

もともとは7年ほど前から、岩手県立大学の学生たちがしていた活動で、地域のボランティアのニーズを知りたいという目的で始めたことでしたが、その最中に東日本大震災が起きました。そのとき、地域の方と顔が見える関係をつくっていたことで、学生が安否確認をおこなうことができたそうです。それを、現地にボランティアで行っていた愛知県の学生が知り、この鍋を囲む活動なら愛知県でもできるかもしれないということで、長久手市で始めました。

鍋を囲む活動の他に「オサケネット」の運営もしていて、年に1回ほどお酒を囲んで暖かい場をつくるという活動もしています。それ以外にも、長久手市内の一斉防災訓練の際には炊き出しに出るなどしています。また地域の小さなお祭りでも、力になれることがあれば参加しています。

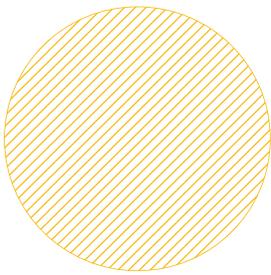
今日は「DoNabenet inあいち」のメンバーが各テーブルに3人ほどいますが、愛知県立大学、愛知淑徳大学、愛知学院大学のメンバーで現在24人います。食べることは誰もがおこなうことで、とても楽しいことなので、それが異世代交流から、食育、学生による地域のボランティア、そして地域の防災や減災につながるきっかけにもなっている点が、とても大きなことだと思っています。

もちろん、団体としての課題もあります。内部的には、メンバーの確保、ミーティング場所や交通費の問題も出ています。外部的には、参加者が固定してしまっていて他の方が参加しづらい場面があったり、周知や広報



活動の不足という問題があったりします。他団体や他大学の学生とも完全につながりきれていないと感じているので、今日のようにたくさんの学生が集まっている機会に、「DoNabenet inあいち」のメンバーとつながってもらえたら嬉しいです。

そんな課題を踏まえてですが、今後はボランティアに行ってできたつながりを食事会に生かして、また食事会でできたつながりを生かしてボランティアとして地域に貢献できればと思っています。食事を囲むと仲良くなりやすいというメリットがあります。今日は、「DoNabenet inあいち」として鍋を提供できました。四つの団体と4種類の鍋があるので、各テーブルを回り、色々な鍋をわいわい楽しみながら、ぜひ色々な団体のことを知ってください。



愛知県立大学

2017年9月20日(水) 第3回4大学合同学生ワーキング(愛知県立大学)にて

愛知県立大学の学生による取り組み02 ぐうすかぴい!

青木春菜さん

愛知県立大学教育福祉学部社会福祉学科3年

一番は、子どもたちに楽しんでもらうこと。

私たちにとっても、障がいについて

理解を深める貴重な機会になっています。



私たちは、発達障がいを持つ子どもたち、そしてその兄弟たちと元気に遊ぶサークルです。もともと「ガリレオクラブハッピーキッズ」という発達障がい児とその兄弟と保護者の方たちのサークルがあり、そのサークルにご協力いただいて、学生と子どもたちがマンツーマンや少人数グループで関わり合いながら遊んでいます。活動は愛知県立大学の体育館でおこなっていますが、年に一度、モリコロパークに遊びに行きます。

活動は月に1回程度で、そのためのミーティングを毎週火曜日のお昼休みにお弁当を食べながらしています。メンバーは障がいに理解のある学生ばかりで、子どもたちのケアをしたいという想いから、愛知県立大学教育福祉学部の社会福祉学科と教育発達学科の学生のみで成り立っています。

2017年9月の活動を例に当日のスケジュールを紹介すると、学校に学生が集合し、まずはロールプレイングをしてその日の活動の練習をします。子どもたちが集まり始めたら、最初にするのが手遊び。これはみんなが歌を歌い、最後に「手はお膝」といった動きを止め、それから始まりの合図をします。毎回同じ流れをすることで、これが始まったら静かにして、お兄さんお姉さんの話を聞いて、それから遊ぶぞという雰囲気をつくるようにしています。

そして、まずは集団遊びをして次に自由遊び、全体遊びをしてから、さようならという流れです。参加する子どもは20人から30人ほどですが、集団遊びは4、5グループに分けて、チーム一丸となる遊びをおこないます。例えば風船バレーなど、わかりやすさを重視した単純なルールの遊びを考えておこなっています。また、開始前には必ずお手本を見せるようにしています。

子どもたちのチームは男女別であったり、異年齢だったり、反対に同年齢にしたりと、様々な分け方をしま

すが、年齢の高いお子さんのいる保護者の方が、小さな子との関わりも増やしたいとおっしゃることもあります。そうした場合は、大きな子が小さな子の面倒を見てくれる雰囲気になるよう、チームを構成していきます。

全体遊びとは、チーム対抗を意識しないで、子どもが一斉に遊べる遊びです。例えば、しっぽ取りやドッチビー、転がしドッチなどをおこなうのですが、



しっぽ取りの場合は学生がしっぽをつけ、子どもはそれを取ることに専念します。ミーティングでは、子どももしっぽをつけたがらないか、そうするとひっかいたりしてケンカになりやすいのではとか、様々な意見が出ましたが、まずは学生がしっぽをつけることになり、子どもたちもとても楽しんでやってくれました。小さい子どもには、ドッチビーは危なくて難しいという意見があり、ボールを転がすだけのドッチボールをするなど、年齢ごとに遊びも工夫しています。

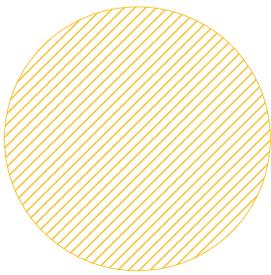
9月の活動では、全体遊びでリズム遊びをしました。これは保護者の方たちから、音楽に触れさせたいという意見があり、音楽と遊びを絡められないかと話し合いました。その結果、音楽に合わせて、マラカスをグループごとに違うリズムで振って、最後に全員で合わせて一つの音楽ができあがるというリズム遊びを考えました。ほとんどの全体遊びは一度きりですが、この遊びは2018年3月に行われる子どもと学生の卒業式で発表できないかと考えていて、卒業生を音楽で送り出すことを目標に練習している最中です。

「ぐうすかぴい！」内で話題になり、話し合ってきたことの一つに、ケンカが起きたときの対応があります。色々な意見が出て、すぐに止めに入った方がいいのではとか、少し放置して様子を見た方がいいのではという意見がありました。かつとなるとすぐに手が出る子が結構多く、殴り合いになることもしばしばあります。そんなときどう対応すればいいか、それぞれに自分の意見があるため、それをどう統一していくかが課題になっています。

怒る言葉や否定的な言葉を使っているのか、という話し合いもしました。きっぱりと伝えるのも大事という意見もあれば、なるべく肯定文に言い換えてという意見もあります。おんぶや抱っこをしてもいいのかという問題も出ました。コミュニケーションの一つと思うので大丈夫という意見、危険だからやめた方がいいという意見、時と場合によるという意見もありました。こうした方がいいという正解がないので、意識を統一することの難しさを感じています。

最近、1年生の新しいメンバーが増え、どうやって雰囲気をつくっていけばいいか、どう統一すればいいか、ますます課題が増えていたのですが、上級生でも正解は難しく、統一しなくてもいいのではないのかという意見が出ました。統一するのではなく、様々な意見があることを理解して、それを知った上で柔軟な行動力を身につけることが大切ではないかという考えに至りました。反省会やミーティングを繰り返しおこない、こういう意見があるんだとみんなが知ることが大事であると思っています。

「ぐうすかぴい！」の一番大きな想いは、子どもたちに思い切り楽しんでもらいたいということです。そして私たち学生も、障がいについて理解を深めることができる貴重な機会になっていると思います。



愛知県立大学

2017年9月20日(水) 第3回4大学合同学生ワーキング(愛知県立大学)にて

愛知県立大学の学生による取り組み03 めだかの会

綿野真輝さん

愛知県立大学教育福祉学部社会福祉学科3年

子どもが思い切り楽しめるように、
学生と子どもだけでなく
学生と保護者の交流も必要です。



主に障がいのある子どもたちと触れ合うボランティアサークルで、「めだかの会」と申します。工作やゲーム、おやつづくりをするなど、月に1回ほどのペースで活動しています。メインは多目的ホールのような場所で活動していますが、ときどきプールやバーベキューといった野外でのイベントもおこなっています。

子どもは一人ひとり、障がいや特性が違うため、それを学生同士が情報共有しないといけません。保護者の方は僕らを信頼して子どもを預けてくれるのですが、当然、親としてはこうしてほしいという要望があります。けれど、毎回参加するメンバーが違っていたり、保護者の想いを反映できない状態が続いているので、学生が活動に対する共通意識を持ち、保護者の想いや子どもの情報をもっと知る必要があります。話し合いを重ねて、学生同士のコミュニケーション不足を解決したいと思っています。

例えば、中高生の男子が女子学生にどこまでスキンシップしていいのか、保護者としても心配になるところです。学生側もダメだよと言う人もいれば、まあいいかと言う人もいるので、意識の共有をしなくてはなりません。人によって違う反応だったりすると子どもたちは混乱するので、そこは「めだかの会」みんなで一貫した接し方をしようと考えています。一番大切なことは、子どもたちに楽しんでもらうことであり、僕らも勉強させてもらう立場なので、その辺りはしっかりやっと思っています。

そのため2017年からは、保護者の方たちに向けて、年間計画書という取り組みを始めました。僕らは今年こんなふうに活動しますとか、今こんな課題がありますとか、目に見える形で保護者の方に誠意を見せたいと考えたからです。子どもたちのことをもっと理解するために、アセスメントシートという子どもの特性を記入する用紙を作成し、みんなで事前に読むなどしています。障がいのある子どもと触れ合うのが初めてという

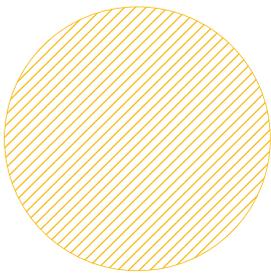


学生がほとんどなので、保護者の方に「こんなときにはどうしたらいいですか」と気楽に尋ねられるよう、保護者の方とももっとコミュニケーションをとりたいと思い、それを今、全体に呼びかけています。

月に1度の活動としては、その季節に合わせたイベントを考えています。各月に計画者の学生がいて、例えば1月は新年会と称して餅つきをしたり、気候がよくなる5月にはお出かけと称して屋外に出かけます。2017年は東山動物園でしたが、他にもモンキーパークなど色々なところに出かけます。9月の運動会には体育館を貸し切って、パン食い競走などあまり激しい運動ではありませんが、みんなで身体を動かしました。運動会には保護者の方たちにも参加してもらい、学生との交流が深まるようにしています。

12月のクリスマス会では、クリスマスツリーの飾りつけや、学生が考えたクリスマスソングの振りつけを子どもたちに踊ってもらうなどします。プレゼント交換もあり、学生は子どもへのプレゼントを手づくりして、自分が担当している子どもに贈ります。私の担当の子どもは妖怪ウォッチが好きなので、そのキャラクターがついた箱をつくり、中に妖怪ウォッチのお菓子を色々詰めてプレゼントしたのですが、とても喜んでくれました。

今後も、子どもたちに思い切り楽しんでもらえるように、子どもと学生だけでなく、保護者との交流の機会もつくりながら、学生同士でイベントを考えていきたいです。



愛知県立大学

2017年9月20日(水) 第3回4大学合同学生ワーキング(愛知県立大学)にて

愛知県立大学の学生による取り組み04 子どものひろば

戸河里日菜子さん

愛知県立大学教育福祉学部教育発達学科2年



地域への貢献によって

地元の方との交流が深まり、

学生にとって大切な経験になっています。

愛知県立大学のサークルで「子どものひろば」と申します。愛知県立大学教育発達学科の学生がメンバーの8~9割を占めています。主に1年生から3年生が所属しており、メンバーは115人ほどで、主な活動内容は年2回行っている「キッズパーク」というイベントの企画運営です。それに加え、外部からのボランティアの依頼も請け負っています。

「キッズパーク」は、毎年夏と冬の2回おこなっています。2017年も7月におこなわれ、主に長久手市、日進市、瀬戸市から800人ほどの子どもが参加してくれました。場所は愛知県立大学の一部の校舎と体育館で、お化け屋敷や工作など六つの企画に分かれ、どの企画も一からつくっておこないます。

毎回、子どもたちは700人から800人集まるので、私たちだけでは対応しきれません。そのため外部の大学生やボランティアサークルから、ボランティアさんを募集して、毎年40人ほどの方たちに入ってもらっています。当日はさらに増えて、だいたい130、140人くらいのメンバーでおこなっています。釣りなどのミニゲームや、武道場を貸し切って大きなサイコロとマスで遊ぶ巨大双六など、自分たちで企画した遊びをします。最後には学生たちがアーチをつくり、その中を通る子どもたちをバイバイと送り出すのが、毎回の決まり事になっています。

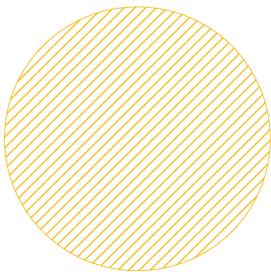
前回のキッズパークでは「IKEA長久手」との連携企画をさせていただきました。IKEAさんの家具や玩具などをブースに置いて、子どもたちが遊ぶ部屋を設けたり、外国人従業員の方たちと小学生が会話する国際交流コーナーの企画もさせていただきました。私たちではできないような企画をしていただき、私たちにとっても貴重な経験を積むことができました。



外部ボランティアは、長久手市や瀬戸市の子ども会や児童館などから依頼を受けることが多く、予定が合えば学生を派遣し、ボランティアとしてイベントに参加します。イベントによっては企画からおこなうこともありますが、キッズパークで幼稚園から小学生まで幅広い年齢に対応しているため、その経験が活かされます。反対に、外部のボランティアがキッズパークに活かされることもあります。

これらの活動を通して、学生は多くのことを学んでいます。サークル員の大半は小学校教員や保育士、幼稚園の先生になることをめざしているため、将来に向けての経験を積むことで、広い視野が身につきます。例えば、子どもたちに起きるハプニングやアクシデント。それを未然に防ぐための危険予測、起きてしまった場合の臨機応変な対応力を養うこともできます。さらに、学科や学年が異なるサークル員同士での交流があるため、一から企画する上で、アイデアを伝え合い、それを形にする力が必要になってきます。また、サークル員同士の絆を深めることは学生生活にも生きています。

また、長久手市、日進市、瀬戸市と連携させていただいているので、地域への貢献をすることにより、地元の方との交流も深まっています。このように年齢や学校の垣根を越えて、絆を深め、コミュニケーションを図ることは、私たちにとって大きな学びとなっています。



愛知県立大学

2017年9月20日(水) 第3回4大学合同学生ワーキング(愛知県立大学)にて

愛知県立大学の学生による取り組み05 楽生部会

城間ゆうさん 愛知県立大学教育福祉学部社会福祉学科1年

松岡凌矢さん 愛知県立大学教育福祉学部社会福祉学科1年



誰もが参加できて、居場所を見つけられる。

そして、誰をも理解できる。そんな最高の空間づくりが目標です。

年齢、障がいの有無などに関係なく、誰でも参加できる空間をつくりたい。いろいろな人が共生しているということを知ってほしい。「楽生部会(がくせいぶかい)」は、そんな想いからできた学生団体です。どんな人も参加でき、同じ空間を共有できるイベントを開催したいと思い、「Zepp Nagoya」というライブハウスで音楽を軸に最高の空間をつくることを最終目標にしています。その最高の空間には、三つの条件があります。

一つ目は「誰でも来ることができる」。行こうと思ったらすぐに行動できる人ばかりでなく、障がいや心に不安など抱えている人は、行こうと思っても少し躊躇してしまう場合があります。それをなくし、誰でも来ることができる空間が必要だと思っています。

二つ目は「誰でも居場所を見つけられる」。誰でも来ることができる場所が、訪れた人すべての居場所になるようにという想いがあります。そのためにはどうしたらよいかを外部の人たちにもお願いをして、アンケートや聞き取り調査をしています。

三つ目の「誰もが誰かを理解することができる」は、境遇や価値観の違う人と出会うこと、話すことで、偏見や差別のようなものがなくなるのではないかと考えています。理解し合うことで、それぞれの居場所ができることもあります。この三つが達成できると、最高の空間が生まれ、みんなが来られると思っています。

では、どうしたら実現できるのかですが、私たちには大事にしていることが六つあり、まず一つ目に「自分のできることを自分のできる範囲で楽しいことだけやる」というのを挙げています。「楽生部会」の「がく」に「楽」という字を使っているのも、みんなで楽しもうという意味を込めてです。メンバーもすべての企画に絶対参加というわけではなく、楽しそうだなと興味を持ったものにだけ参加すればいいという考えです。障がい者の方とか弱者と言われる方たちだけのためでなく、企画する側、関わっている人全員が楽しめるようにやって

いけたらと思っています。

二つ目には、「様々な意見を直接聞きに行く」があります。私たちは経験不足で知らないことが多く、偏った企画になる危うさもあります。よりみんなが楽しむには、様々な立場の方の意見を聞き、色々な視点を知り、企画に活かしていくことが必要です。それも直接聞くことが大事で、文面でやりとりすることはできますが、直接話すことによって相手との距離が縮まると思うんです。距離感が近いと込み入った話もしやすくなるので、直接のやりとりを意識するようにしています。



そして三つ目は、「学部学科を問わずメンバーを集める」。なぜかという、こうした活動は福祉系の学生ばかりが集まりがちで、専門用語ばかり使ってしまったたり、偏りが出てきます。よりみんなが楽しめる状態にするには、福祉系の学生以外の学生も巻き込み、様々な意見を取り入れることで、より多くの人を楽しめる企画をつくっていけると思っています。

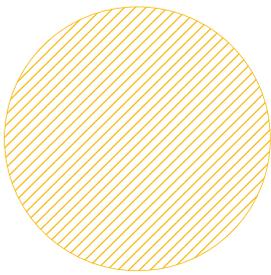
他に、目標実現に向けておこなうこととして「学生の特権を生かす」「他大学ともつながる」「社会に訴えられるようにアウトプットする」を掲げています。学生の特権を生かして他大学と連携すれば、さらに活動が広がり、その他の意見を取り込むことができるようになります。何か行動を起こすだけで注目を浴びるのも、学生の特権で、それを最大限に生かし、社会に対して行動していけたらと思っています。フットワークの軽さも、時間のある学生にしかない特権で、それを生かして行動していくことが最高の空間づくりにつながっていくと思っています。

「楽生部会」はまだ2017年4月にできたばかりですが、活動の一つとして「愛知トライ」に関わらせていただいています。これは、「店舗の利用に困難のある方へ お手伝いします お気軽にどうぞ」というステッカーをお店や施設の方に貼っていただけるように交渉し、同時に「障害者差別解消法」についても知っていただくという活動です。お店の方側の意見や、車椅子ユーザーの方と一緒に行動する中で直接話を聞くことができるため、色々なことに気づけ、最終目標である「最高の空間をつくる」につながるいい経験です。

その他の活動として、交流会もおこなっています。愛知県立大学のジャズサークルに依頼して、車椅子利用者の方が住んでいる施設で演奏をさせていただきました。その演奏後に交流会という形で、「楽生部会」とジャズサークルのメンバーが、高齢者の方々と関わる場を設けました。楽生部会のメンバーはもちろんですが、ジャズサークルのメンバーを巻き込んで、楽しい空間をつくることができました。

11月には「県大祭」がおこなわれるのですが、多くの人に来てもらうにはどうすればよいかを話し合っている最中です。まず県大調査といって、愛知県立大学内の不便な箇所の調査をおこないました。車椅子や白杖を使っている方と一緒に行動しながら、どういう不便な点があるかを確認しました。また、高齢者体験セットを借り、高齢者の方々の視界や動きにくさを実際に体感しながらの調査もしました。この調査を「県大祭」に生かしたいと思っています。

こうした活動をおこなっていますが、興味を持った方は連絡をください。何か違うなと思ったら、やめても構いません。30人ほどのメンバーは、学年もばらばらで、学部も福祉系だけでなく文学部など色々な学部の学生がいて、他大学も巻き込んでいます。少しでも興味があったらぜひ参加してください。



愛知県立大学

2017年9月20日(水) 第3回4大学合同学生ワーキング(愛知県立大学)にて

ゲストトーク

学生のボランティア活動と社会とのつながり

野村こはるさん 長久手市役所福祉部福祉課

加藤昭宏さん 長久手市社会福祉協議会コミュニティソーシャルワーカー

司会:松宮朝先生(愛知県立大学教育福祉学部社会福祉学科准教授)

梓にはまった考えやものの見方が、

学生さんが1人加わることで

すぐく変化することがあります。(野村こはるさん)



SOSの早期発見、早期対応ができる

地域づくりのため学生さんと共に連携しています。(加藤昭宏さん)

松宮:今日は愛知県立大学の卒業生で、今は長久手市役所で働いている野村さんと、長久手市の社会福祉協議会で働いている加藤さんに、学生時代に関わっていたボランティアについて、また今の学生とのつながりについて、働く立場から紹介していただければと思います。現在の仕事内容などを野村さんからお願いします。

野村:長久手市役所に入って3年目になります。私は社会福祉学科卒業で、学生時代は「めだかの会」や「DoNabenet inあいち」にも入っていました。こうした学生団体で活動していくうちに、長久手市がどんなまちか気になり、イベントで地域の方と出会ったりする中、「なでラボ」に入ることになりました。それは、市の職員と長久手市の若い人たちがまちづくりについて考える会で、学生と地域をつなげるというところが、私の中ですごく楽しみになり、市役所で働きたいという想いから就職につながりました。学生時代は自分がやりたいことを目一杯やれる時期です。社会人になってからそう感じる人が多いので、自分の活動だけでなく、今日のように色々な活動をしている人と関わると、より視野が広がると思います。

加藤:長久手市社会福祉協議会のコミュニティソーシャルワーカーといまして、地域の福祉の何でも相談員をやっています。僕も愛知県立大学の卒業生で、名古屋市で3年間医療ソーシャルワーカーという病院の相談員をやっていました。その後、働きながら愛知県立大学の大学院に進学することになり、2017年4月から博士課程に入っています。現在は、地域の中で自らSOSを出せない人、ゴミ屋敷だったり引きこもりや不登

校、あるいは発達障がいなど、福祉の制度をあてはめれば解決するという問題ではなく、対応できる制度がなかったり、様々な福祉課題を抱えている方を地域の中で発見し、いかに地域で支え続けられるかというしくみ、「地域包括ケアシステム」とか「我が事・丸ごと地域共生社会」とか、そんな名称で耳にするとと思うのですが、そうしたしくみづくりを住民の方と一緒に作る仕事をしています。

松宮:野村さんは学生時代から「なでラボ」などに参加していて、まさにボランティアと行政とのつながり、地域とのつながりというネットワークがありましたが、そうした場でもっと大学生とつながりたいという声を結構聞きます。野村さんの立場から見て、こうしてつながればこんなことが一緒にできるのではないかと、あるいは地域の人たちはこんなことを求めているんだということを紹介してもらえますか。

野村:「なでラボ」は市の若手職員と地域の若い人を合体させて、手探りの状況から始めたので、最初はまちづくりのプロに入っていただいていたいました。ワークショップをしながら、まちの課題だけでなくいい部分を発見したり、自分たちのしたいことを考えるために視察に行ったり、職員と市民の枠を取っ払った感じで、みんなが一から勉強するという環境でした。そういう中に学生さんが入ってくると、職員や市民とは別の視点で長久手市への要望や、明るい意見を出してもらえると感じています。また、市役所や地域の中で一つの活動をしている人は、枠にはまった考え方やものの見方をしがちですが、学生さんが1人加わることで、すごく変化することがあるので、難しく考えずに気軽に来てもらえるといいですね。

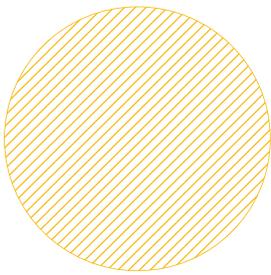
松宮:学生の側からすると、そういった市やまちづくりの方と一緒に活動するのは敷居が高く感じるようですが、野村さんは最初どうでしたか？

野村:松宮先生の紹介で「なでラボ」に参加することになったのですが、最初はとても緊張しました。予定表には3回分の予定しか載っていなかったもので、3回で終わると思っていたら、「1年間通して頑張りましょう！」みたいな雰囲気です(笑)。少々予想外ではありましたが、他の方も初めてという状況で、「学生さんなんだね、どんな活動してるの?」とか話しかけてもらえて、楽しく続けられました。

松宮:長久手市は、大学生が関わられるような企画が盛りだくさんです。もちろん最初はハードルが高いと思いますが、受け入れる土壌は整っているので、少し考えていただければと思います。

松宮:加藤さんにお伺いしたいのですが、社会福祉協議会では「子ども食堂」や子育てのボランティアなど、色々な活動を学生としてしていると思います。大学生とおこなっている活動を、具体的に教えてください。

加藤:僕が社会福祉協議会に転職をしたときに、福祉の何でも相談員が地域に在ることを周知する必要がありました。同じタイミングで「DoNabenet inあいち」が「土鍋やります」というちらしを配るというので、僕のち



愛知県立大学

ゲストトーク 学生のボランティア活動と社会とのつながり

らしも学生さんと一緒にポスティングしたことがあります。愛知県立大学の授業にお邪魔させていただいた関係で、同大学の学生さんには「子ども食堂」にも入っていただいて、当日のお手伝いや宿題を見てもらうボランティアをお願いしています。そんな中で、大きく紹介したいのは、学生さんたちとつくっている「あさがお」という子育て応援冊子です。長久手市は転入世帯が多く、第一子が生まれたものの育て方がわからないという母親も多い。近くにママ友もないし、自分の親も遠く離れてしまった。孤立しがちなお母さんも多いと聞きます。そんな話を学生としていて、赤ちゃんの心の発達やパパママのストレス軽減法、子育てサロンの紹介や、困った場合には相談員もいますよ、という情報をまとめた冊子を一緒につくることになりました。もう一つは、小学校区内にある集会所をお借りして、1歳から5、6歳までの子育て中のお母さんに自由に過ごしてもらうという企画を計画しています。学生さんが子どもの面倒を見ている間に、ゆっくり休んでください、おしゃべりしていてもいいし、読書していてもいい、何でも好きなことをしてくださいという企画です。こちらから学生さんには専門的な知識を話し、反対に学生さんからは若いアイデアの提案、ちらしの作成やポスティングをしてもらっています。こうしてSOSの早期発見、早期対応ができる地域づくりという意味合いで、一緒に連携をさせていただいています。

松宮:2017年6月28日に実施した最初のワーキングで愛知淑徳大学の小島祥美先生がおっしゃったように、こうした活動は、地域にとっても学生にとってもハッピーじゃないといけないと思います。学生側は地域とつながれば、もっと大きな活動にできるし、困った事があれば大人が支えてくれるかもしれない。逆に地域側は、学生の力をうまく借りることで、冊子づくりや子育ての場などでハッピーな状況が生まれる。例えば、愛知県立芸術大学の学生さんと一緒に冊子をつくれたらもっといいのでは、愛知医科大学の学生さんならもっと違う視点で活動が進んで行くのでは、とまだまだつながりができると思います。皆さんは既に色々な活動をされていると思いますが、今ある課題とか、より今後ハッピーになっていける方法を話し合っしてほしいと思います。

2017年6月28日(水) 第1回4大学合同学生ワーキング(愛知医科大学)にて

地域福祉×学生の可能性

松宮朝先生

愛知県立大学教育福祉学部社会福祉学科准教授

ボランティアとは特別な人がやるのではなく、
その真逆であるということ。
全ての人が、互いに支え合うしくみをつくっていく。



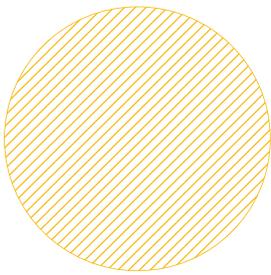
福祉ってどんなイメージでしょう。愛知県立芸術大学の皆さんからは「バリアフリー」、愛知医科大学の皆さんからは「法律のイメージ」という意見が出ました。多分、社会福祉を専攻する人からは「幸福」とか出てくるので、福祉にはそういう面もあるのかと新しい発見があったと思います。

長久手市は「日本一の福祉のまち」をめざしています。本来なら大風呂敷すぎて、なかなか言えないことです。でも、本気で言っているのですから、私たち大学側も本気で受け止めようと思います。今日のワーキングにあった「長久手市のハッピー」と「学生のハッピー」を、追求しましょうということです。

長久手市、実は自治会の加入率が53%くらいで、愛知県一低いです。若くて元気なまちで、毎年3000人ほど新しい人が入ってくる。でも、愛知県54の市町村の中で一番つながりが薄い。市長の言葉を借りると「だから、煩わしいまちをもう一度つくろう」ということです。地域の福祉が注目される今、私たちもまともに受け止めて、考えていきたいです。

一見すると、福祉と結びつかないような活動がたくさんあります。「りにさい(リニモ沿線合同大学祭実行委員会)」の清掃活動も、あれは福祉じゃないよ、と思う人がいるかもしれませんが、住みよい環境をつくることにつながっています。今日のワーキングでバリアフリーの話が出ましたが、愛知県立芸術大学の学生さんがやっているデザインもそうです。環境をよくすること、環境をつくること、これらを地域福祉の活動とみなせば、必ずどこかにつながっていきます。

「普段のつながり」をどのようにつくるかを考えて「りにさい」をやっているという櫻木さんの言葉(P.35参照)、それも広い意味での地域福祉です。藤本さんが言った「ニーズに応える」といったことから、関係づく



愛知県立大学

地域福祉×学生の可能性

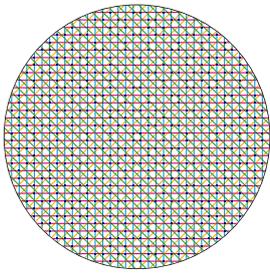


りや環境づくりにつなげていくことができそうです (P.34参照)。そうしたことを考えて、日本一の福祉のまちづくりをめざす。それが、今日まさにスタートしました。ワーキングに参加し、たくさんお話をさせていただいて、学生でもこういうことが提案できるんだと、2018年お披露目会では盛大にコラボ先を逆指名していただきたいと思います。

ボランティア活動をしている人たちからよく聞く悩みというか、三つの疑問があります。一つは「きれいな理念ばかりで、本当にできるのか」。二つ目は「特別な人がやることと思われていないか」。福祉の学生さんは、「ボランティアやって偉いね」と言われたことはありませんか。「私そんなことできません」みたいな。そして三つ目に「一方的な活動なのではないか」。ずっと奉仕の活動をしていると、本当にこれでいいのだろうかという疑問になってきます。

行政の仕事とは、美しい理念の血と肉をつくっていく仕事だと思います。ボランティアも同じです。理念が建前にならないような形で現実のものにしていく。特別な人がやるのではなく、その真逆であるということ。全ての人互いに支え合うしくみをつくっていく。まさに皆さんが今考えていることで、特別な人だけに任せおくものではありません。人のための奉仕は、自分自身にとっても重要な意味を持つ。こうした実践をすることが、先ほどの疑問を解消するのではないかと思います。

「理念だけでは？」…理念を現実のものにする行動でしょう。「特別な人がやることでは？」…自発的に、みんなが参加できるしくみをつくることでしょう。「人のための奉仕？」…参加する全ての人々の成長、地域と大学生が共にハッピーになる活動をつくることが重要なポイントでしょう。まさにこれはボランティアの活動です。地域と大学の連携でそのしくみをつくり、やりやすいこと提案し、そして、日本一の福祉のまちに本当につながる活動になればと思っています。これからみんな考えていきましょう。



長久手市

2017年8月4日(金)第2回4大学合同学生ワーキング(愛知淑徳大学)にて 一人ひとりに役割と居場所があるまちをめざして

吉田一平長久手市長



このまち全体にもう一度みどりを復活させ、
もう一度声を掛け合い、
もう一度つながりのあるまちにしたい。

長久手は、50年ほど前まで山の中でした。先人たちは、貧しいまちを何とかしようと区画整理という手法を使って、山を削り、田んぼを埋めて、住宅地をつくり、今の豊かな長久手をつくりあげてくださいました。50年前、当時7500人の人口が、今は約57000人にまで一気に増えました。現在、長久手に暮らす多くの方は、他の地域から引っ越して来られた方々です。そうした方々にも、長久手を「ふるさと」と思っていたため、もう一度、まちを雑木林にしたいと思っています。みどりには、人や虫など、様々な生命が引きつけられます。みどりのあるところに、人は集まり、戻って来ます。皆さんと一緒に木を植え、30年先40年先50年先、今の子どもたちがいったん、長久手を離れたとしても、「やっぱり長久手に戻りたい」と思えるみどりに囲まれたまちにしたいと思っています。

そして、子どもも高齢者も寝たきりの人も認知症の人も、「私たちは必要とされているんだ」「ここにいてもいいんだ」「役割があるんだ」という社会にしたいと思っています。例えば、老人ホームは、介護する側と介護される側という構造ですが、その中に不登校の子や学生が入ると、普段は介護してもらうために「ありがとう」「すまんあ」と頭を下げばかりのおばあさんやおじいさんが、不登校の子を自分の孫のように叱ったり、夜中に騒いでいる学生を注意したり、いきいきします。色々な人がまざって暮らすと、そこにそれぞれの立つ瀬が生まれるのです。

雑木林には、ナラの木もあればクヌギの木もあります。大きい木もあれば小さい木もあって、どの木どれがいいとかはありません。色々なものがまざり合う雑木林のようなまち、雑木林のような人のあり方、どんな人でもいいと、すべての人を受け入れるまちが、福祉というか、あるべき社会ではないかと思えます。成績のい

い子だけがほめられるとか、仕事ができる人だけが優秀とか、元気な人だけがいいとかではなく、少し切り口を変えたら、誰にも立つ瀬が生まれるのではないかと思います。

長久手市は、東洋経済新報社の住みよさランキング2017で、全国で3番目に住みやすいまちです。ただ、皆さんが思う住みよさとは、わずらわしいことがないということではないでしょうか。近所の人との会話がなくても、税金を払えば役



所が何でもしてくれる。そんなまちが、今の長久手の皆さんにとっての快適で住みやすいということかもしれません。それをあえて、ご近所が支え合う、わずらわしいまちにしようと取り組んでいます。

これまでの人口が増加する時代は、山の頂上をめざして一生懸命走ってきたようなものです。ところが、人口が減り始め、麓へ降りる時代になりました。山の麓は360度に広がっているので、どこへ降りるのが正解なのか、急いで降りる必要が本当にあるのかわかりません。降りていく時代の人口減少社会では、価値観は大きく変わります。

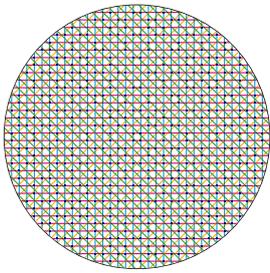
かつて子どもが生まれ、子育てについて悩んだら、ネットや役所ではなく周囲の人に相談する時代がありました。今の長久手は、他地域からの流入が多く、お互いをほとんど知りません。あえてわずらわしいまちにしたいというのは、今から地域で解決できる地域の問題は、自分たちで考えていくようにしていかないと、人口が今の半分かくらいになり、市の財政が厳しくなったときに、市民が力を合わせて何かを行えるという自立したまちにならないからです。

そうしたまちづくりを支える職員を育てるために、長久手市役所でも個人のインターネットの使用を制限して、ネット端末も職員同士で共有するようにしました。すると、互いに利用状況を確認し合って貸し借りをしたり、ネットで調べるのではなく直接誰かに尋ねたりするようになる。そんなわずらわしさによって、より多くの人が関わり合い、交流が生まれるという状況をつくり出しています。

長久手市でも、孤立死や子どもの虐待など、様々な問題が起きていますが、地域の中で誰も声を掛け合わないという現状があります。声を掛けるのは、とてもわずらわしいことですが、ちょっと「大丈夫?」と声を掛けてもらえるだけで、「私を見てくれている。私はここにいていいんだ」という気持ちになります。

このまちを、市民同士が支え合って、市民によって問題解決していける自立したまちにしたいのです。そんなわずらわしいまちづくりのために、ぜひ、声掛けなど、皆さんにも協力していただきたいと思います。

このまち全体にもう一度みどりを復活させ、もう一度、声を掛け合い、もう一度つながりのあるまちにしたい。何も大したことじゃないんです。声掛けには、お金もかかりません(笑)。みんなでこれだけのことをやったら、このまちは日本一の福祉のまちになると信じ、今後も協力していただけたらと思っています。



長久手市

2017年6月28日(水) 第1回4大学合同学生ワーキング(愛知医科大学)にて

大学の力を生かしたまちづくり

笹山実希さん

長久手市役所暮らし文化部たつせがある課



多くの人の意見を取り入れたまちづくりに、
学生の皆さんならではの力を貸していただきたいです。

私の部署名の「たつせがある」、あまり耳なじみないかと思いますが、吉田市長がつくった言葉です。「立つ瀬がない」から転じて「立つ瀬がある」。つまり、人にはみんな役割や居場所があるという意味で使っています。

現在、長久手市は「大学連携基本計画」というものをつくろうとしています。ここで、この計画をつくるに至った背景や展望について、学生の皆さんと一緒に考えたいと思います。

長久手市には、大変なお宝があります。それは、長久手市に通う大学生の皆さん、そして大学です。まちに長く住む方々には気づかないような視点を持っていらして、それが地域との交流によって人々に気づきを促したり、まちについて再発見するきっかけになったりします。また大学に蓄積された知識や情報、そしてノウハウといったすばらしい社会資本は、様々なまちの課題を解決するのに大いに寄与する可能性があります。

長久手市は、東西約8キロ、南北約4キロの小さなまちです。そこに愛知医科大学、愛知淑徳大学、愛知県立芸術大学、愛知県立大学という4つの異なる分野の大学があります。2017年4月末の発表では、人口56841人。それに対し、長久手市に通う大学生は12585人。加えてリニモ沿線を見てみると、大学10校のキャンパスに囲まれています。視察や研修で集まった全国の方からも、「大学がたくさんあってすごい」と驚かれる。希に見るユニークなまちです。こうした恵まれた環境の中、その大学や学生の皆さんの力をもっともお借りして、まちづくりに生かしたい。そんな思いから「大学連携基本計画」をつくることになりました。

東洋経済新報社による自治体の「住みよさランキング」を見ると、長久手市が町から市になって以来、4年連続で総合10位以内、最新のランキングでは全国3位でした。また、2015年度国勢調査によりますと、人口増加率は県内1位、平均年齢も38.6歳で全国一若いまちという結果です。人口も継続的に増加し、若くて元気なま



ちとされていますが、課題がないわけではありません。

例えば、将来の課題に触れてみます。2050年頃には、長久手市も人口が減少し始め、経験したことのない超高齢かつ人口減少社会を迎えます。要介護者や認知症の患者、孤立死が増え、そして社会保障費や公共施設の維持費が増える反面、税収は減る…といった課題がいずれやってきますが、本当に困ったという状況になったとき、行政だけでは解決できません。人口の減少によって税収が減ると、市役所の職員も不足し、行政に任せていたことが成り立たなくなるからです。また、人手が減るということは、アイデアの多様性も減るといった結果につながります。

そのため、大学の力、そして学生の皆さんの力、市民の皆さんの力、企業の力、この地域に関わる多くの力が必要となってきます。現在、長久手市の職員は前例を踏襲するのではなく、まちの多様な人々の考えを受け入れる、柔軟なくみづくりをしています。多くの人の意見を取り入れたまちづくりに、学生の皆さんならではの力を貸していただきたいです。

地域の課題を皆さんと共有し、これから一緒に考えていきたいと思っています。「大学連携基本計画」を通じ、そういった連携をスムーズにするための拠点や、今ある連携を継続化できるようにするしくみをつくっていきたくと思っています。

市にとっての大学連携のメリットをお話してきましたが、大学の発展にとっても、お互いの関わりが欠かせないと思います。学生の皆さんも、もっと地域という実践の現場を大いに活用し、まちの人々と交流していただきたいと思います。まちのそれぞれの立場の人が、役割と居場所を持って自らのまちづくりに関わるという新しいまちの形をめざして、100年先の長久手市がさらに魅力的になるように、大学と地域の連携を深めて、それぞれの強みをもっと生かせるようにしていきましょう。

結び チャレンジできるまち、長久手市に

まちおこしに必要な要素は「若者、バカ者、よそ者」と言われています。学生はすでに若者、よそ者であるかもしれませんが、あえて「バカ者」でもあってほしいです。「バカ者」といっても決して文字通りのバカな者ではありません。ここで言う「バカ者」とは、周囲の空気を読まず、前例や社会の常識や既成概念にとらわれず、自分の想いで突っ走る無鉄砲さです。それこそが若者の特権であり、そこから新しい可能性が開かれていくでしょう。近年成功を遂げている起業家や科学者の多くは、若い頃の情熱やアイデアが元になって成功につながっています。若い頃の情熱は、新しい時代をつくっていくためには非常に重要です。最初は失敗も多いかもしれませんが、むしろ中途半端な成功よりは大きな失敗から大きく学ぶことができます。

多様性や柔軟性のない画一的で硬直的な組織や地域は弾力性を失い、活力が削がれて衰退していくでしょう。変化の激しい今の時代には、大きな環境の変化が起こる可能性があります。その環境の変化に対応して生き残るためには、多様な人たちが地域を適度にかく乱することによって活力を生んでいくことが求められます。だから長久手市は若者がチャレンジできるまち、新しいこと、やりたいことができるまちであってほしいです。新しいことにチャレンジするのだから失敗は当たり前。でも、長年大学生のまちとして発展してきた長久手市は、その失敗を受け入れる懐の深さを持っていると思いますし、今でこそ大きな顔をしている大人たちも、若い頃は散々失敗をして周りの大人たちに迷惑をかけてきたに違いありません。だから、大学生の皆さんも臆せずどんどん色々なことにチャレンジして、長久手市に新しい刺激をもたらしてほしいと願います。

少子高齢化が進み、多くのまちが人口減少に悩む日本において、多くの若者がいて人口も増加している長久手市は、なんと恵まれていることでしょう。そんな長久手市だからこそできるチャレンジができれば良いと思います。

「長久手市大学連携推進ビジョン4U」は、長久手市が、推進すべき大学連携事業について市内4大学と共同で策定しました。

長久手市大学連携推進ビジョン策定ワーキンググループ

(受託研究「長久手市大学連携基本計画策定に関する研究」として)

石井 晴雄(愛知県立芸術大学美術学部デザイン・工芸科デザイン専攻准教授)

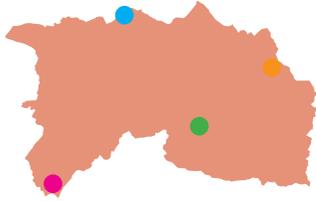
川原 千香子(愛知医科大学医学部シミュレーションセンター講師)

小島 祥美(愛知淑徳大学交流文化学部准教授)

松宮 朝(愛知県立大学教育福祉学部社会福祉学科准教授)

(五十音順)

NAGAKUTE VISION 4U



長久手市大学連携基本計画「長久手市大学連携推進ビジョン4U」

発行 長久手市

住所 〒480-1196 愛知県長久手市岩作城の内60番地1

TEL 0561-63-1111(代)

ホームページ nagakutevision4u.com

発行年月 2018年3月